

平成 30 年度
寂地国有林外におけるニホンジカの
生息状況及び森林被害の現況把握調査業務
報 告 書

平成 31 年 1 月

近畿中国森林管理局 山口森林管理事務所

目 次

1. 業務目的	1
2. 調査対象地	1
3. 履行期間	5
3.1 調査時期	5
4. 調査方法	6
4.1 糞塊密度調査	6
4.2 森林植生衰退状況調査	10
4.3 自動撮影カメラの設置	14
5. 調査結果のとりまとめ及び考察	18
5.1 とりまとめ	18
5.2 考察	18
6. 山口県におけるニホンジカの分布状況	19
7. 調査結果	23
7.1 寂地国有林	23
7.1.1 調査地の概要	23
7.1.2 糞塊密度調査	25
7.1.3 森林植生衰退状況調査	27
7.1.4 自動撮影カメラの設置	29
7.1.5 希少植物の確認状況	31
7.1.6 移動中のシカ被害の痕跡	34
7.1.7 寂地国有林におけるニホンジカの生息状況と森林被害の現況	35
7.2 右谷国有林	36
7.2.1 調査地の概要	36
7.2.2 糞塊密度調査	38
7.2.3 森林植生衰退状況調査	40
7.2.4 自動撮影カメラの設置	43
7.2.5 希少植物の確認状況	45
7.2.6 移動中のシカ被害の痕跡	47
7.2.7 右谷国有林におけるニホンジカの生息状況と森林被害の現況	48
7.3 高鉢山国有林	49
7.3.1 調査地の概要	49
7.3.2 糞塊密度調査	50
7.3.3 森林植生衰退状況調査	52
7.3.4 自動撮影カメラの設置	54
7.3.5 希少植物の確認状況	56

7.3.6 移動中のシカ被害の痕跡.....	58
7.3.7 高鉢山国有林におけるニホンジカの生息状況と森林被害の現況.....	59
8 調査結果のまとめと考察.....	60
8.1 調査対象国有林におけるシカの生息状況.....	61
8.2 今後のシカ被害対策.....	64

※資料編

1. 業務目的

山口県内ではニホンジカ(以下、「シカ」という。)の個体数は乱獲等の影響により、昭和30年代前半には県北西部に50頭程度と減少したが、近年はニホンジカの保護政策により、農林業被害が深刻化するまでに増加した。山口県内の国有林内では、平成28年度からシカによる森林被害状況等のモニタリング調査(糞塊密度調査及び森林植生衰退状況調査)を実施している。平成30年度においても、シカの糞塊密度調査及び森林植生衰退状況調査することにより、国有林内のシカの生息状況及び森林被害を検証するとともに、希少植物の有無及び被害状況の把握を目的とする。

2. 調査対象地

調査対象国有林は以下の3箇所で、総面積は999haである。表2.1及び図2.1～2.4に調査対象国有林とそれぞれの国有林の位置を示す。

表 2.1 調査対象地

国有林名	対象林班	面積 (ha)	調査項目		
			糞塊密度調査	森林植生衰退状況調査	自動撮影カメラの設置
寂地国有林	52～54林班	258	○	○	○
右谷国有林	64～71林班	583	○	○	○
高鉢山国有林	55～56林班	158	○	○	○

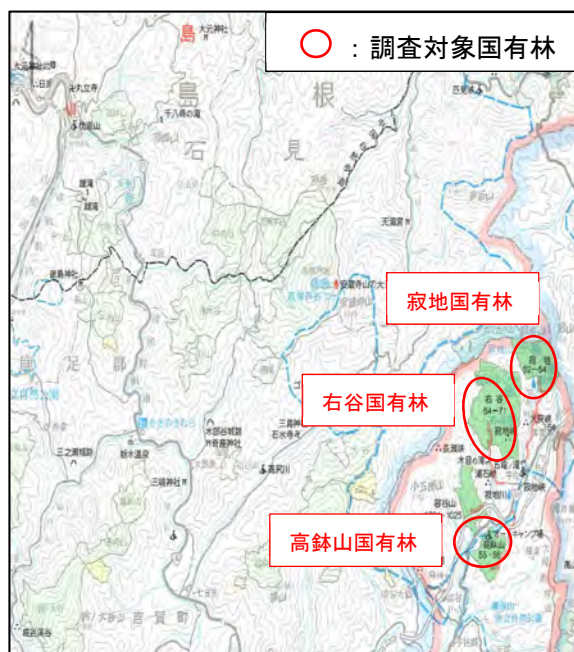


図 2.1 調査対象区域

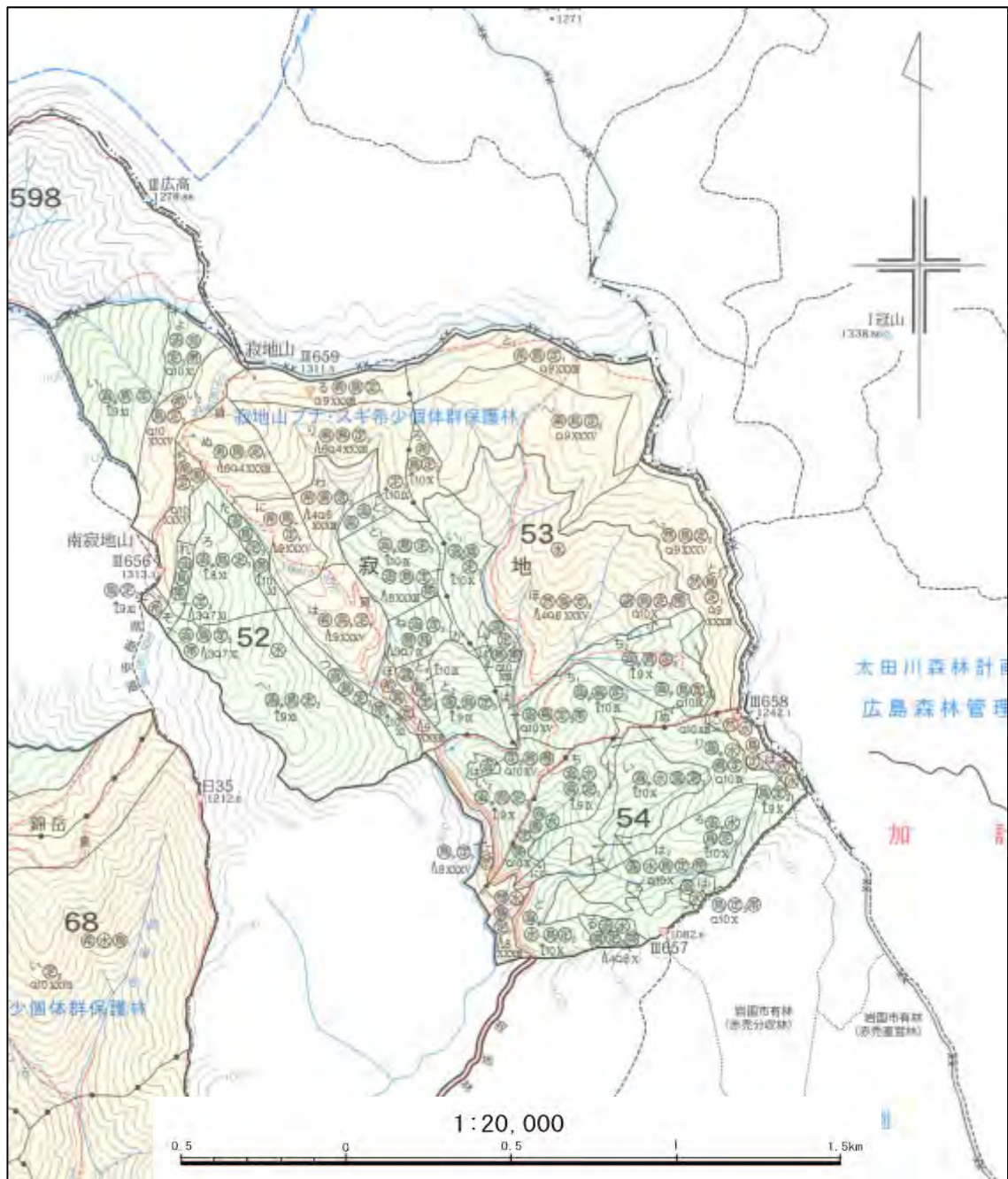


図 2.2 寂地国有林 対象林班 52~54

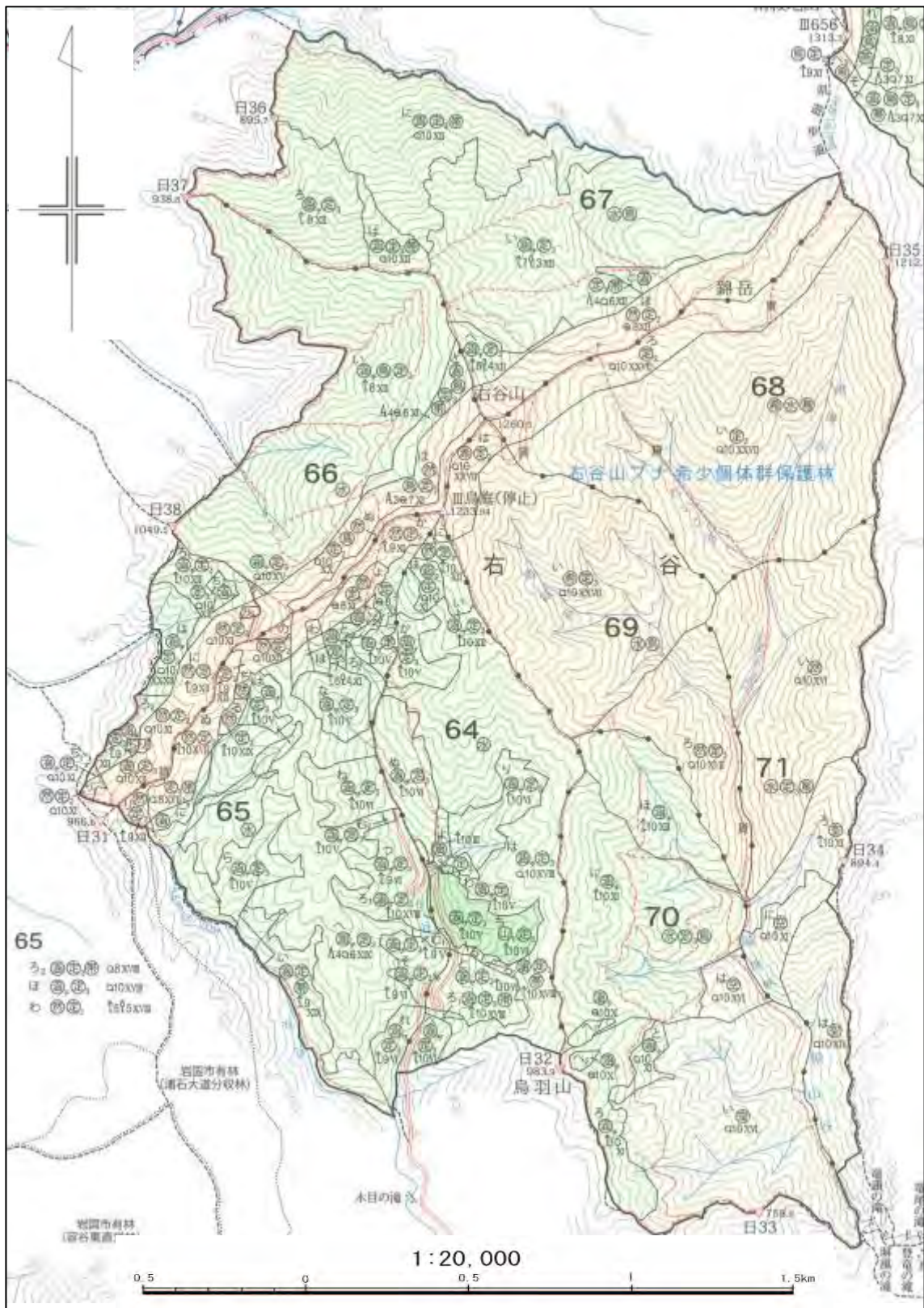


図 2.3 右谷国有林 対象林班 64～71

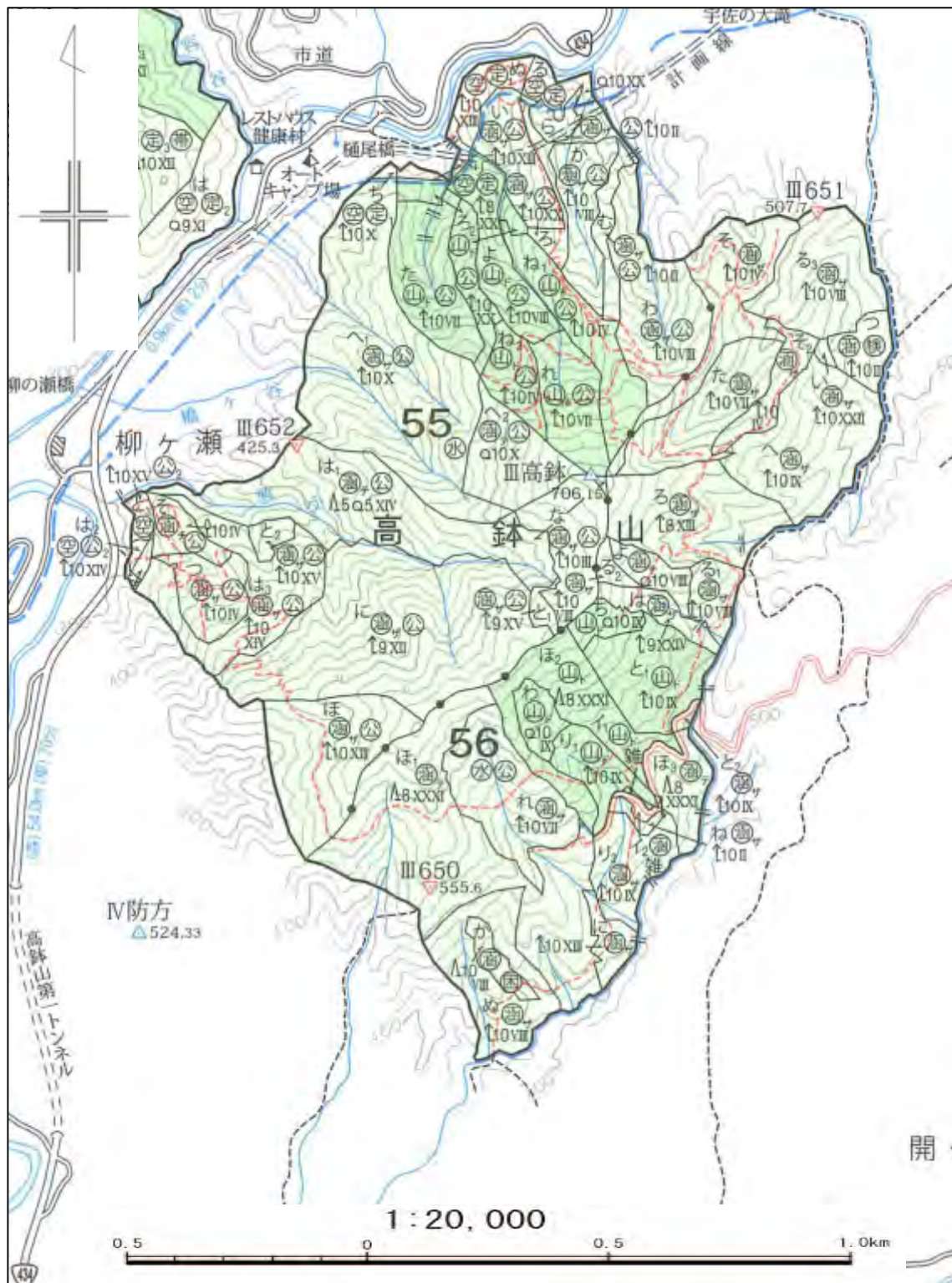


図 2.4 高鉢山国有林 対象林班 55~56

3. 履行期間

平成30年7月26日～平成31年1月31日

3.1 調査時期

表3.1に各調査の実施日を示す。

表 3.1 調査日程

調査項目	実施日
糞塊密度調査	平成30年10月24日～25日
森林植生衰退状況調査	平成30年10月24日～25日
自動撮影カメラの設置と回収 およびカメラ作動チェックと撮影 データの回収	平成30年8月29日～31日
	平成30年9月27日～28日
	平成30年10月24日～25日
	平成30年12月10日～11日

4. 調査方法

4.1 糞塊密度調査

調査ラインは糞塊密度調査に適した箇所を選定するが、実施にあたっては、現地の状況地形条件等から調査に適さない場合は、調査対象箇所及び調査ラインを変更することとした。本調査では各ルートの事前踏査で不適とされる箇所がなかったことから、調査ラインはあらかじめ選定された踏査ルート上に設定した。図 4.1.1～4.1.3 に糞塊密度調査の調査箇所を示す。

調査ラインは地形の変化点等(尾根の結合部、ピーク、鞍部、構造物(鉄塔、三角点など)又は特徴的な地形等)で区切り、延長距離は1調査ライン概ね2kmとした。地形の変化点等はハンディGPSにより位置を確認し記録した。調査区画は、決定した調査ライン上において、左右約0.5m(計1.0m幅)を1区画とし、調査区画内の糞塊数及び糞塊の新鮮度(新・中・旧)を記録した。調査区画内において確認した糞塊については、「糞塊密度調査野帳」に、10粒以上の場合はハンディGPSにより確認位置を記録し、10粒未満の場合には糞塊のみ記録した。また、各調査ラインの延長距離についても記録した。

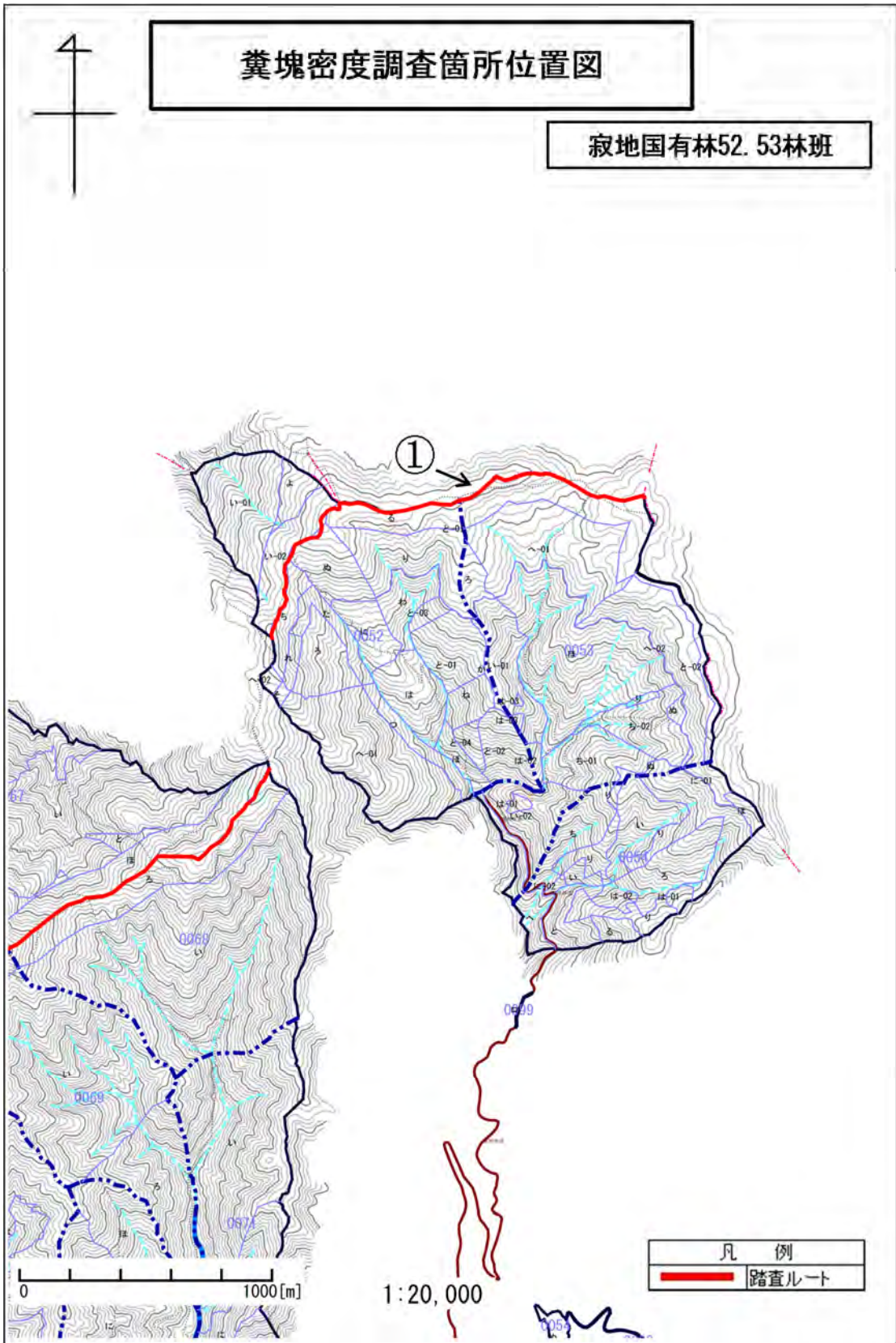
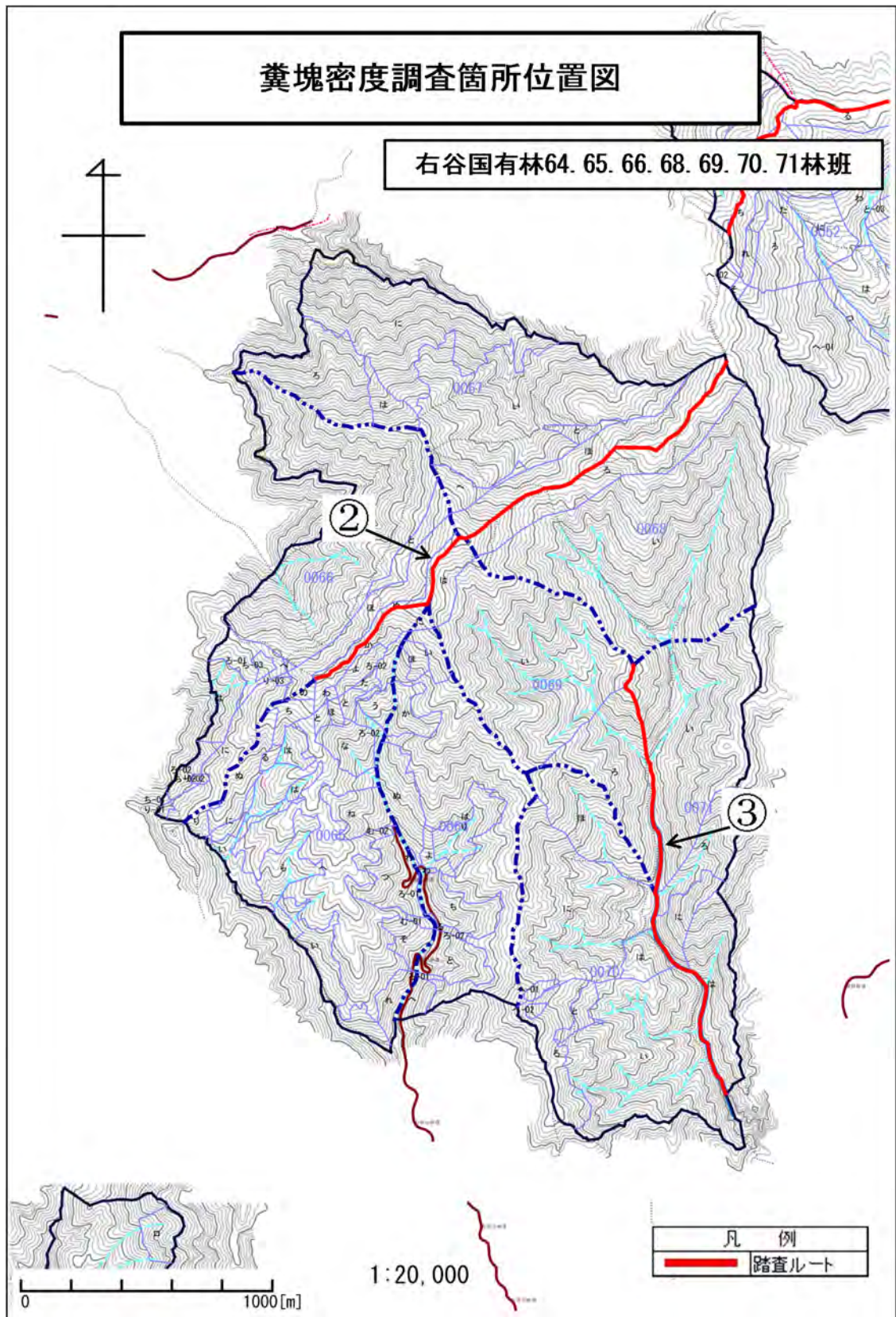


图 4.1.1 糞塊密度調査箇所位置図(寂地国有林)



4.1.2 糞塊密度調査箇所位置図(右谷国有林)

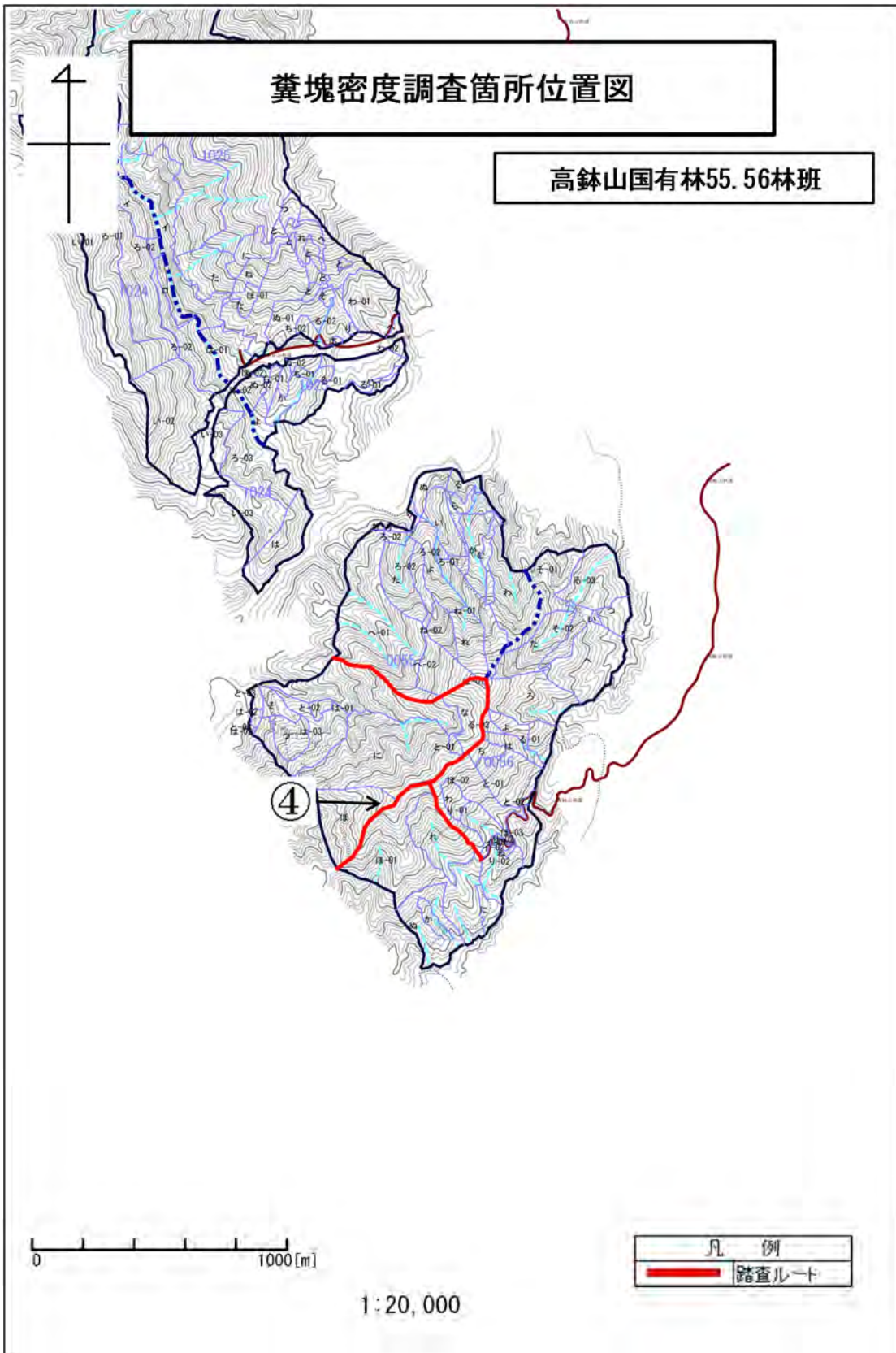


図 4.1.3 糞塊密度調査箇所位置図 (高鉢山国有林)

4.2 森林植生衰退状況調査

森林植生衰退状況調査については、「森林植生衰退状況調査箇所位置図」の対象域内で1対象区域当たり1箇所調査することとし、調査対象区域は落葉広葉樹を主林木とする林分とした。図4.2.1～4.2.3に調査対象区域を示す。

調査内容はシカによる下層植生衰退度を算出するための下層植生調査とし、以下のア～オ)の選定基準に基づいて行った。

また、現地の状況や地形条件等から森林植生衰退状況調査に適さない対象区域がある場合には、事前に申し出を行い協議することとした。

ア 森林植生衰退状況調査の林分選定基準

ア) 林冠の高さが10m以上であること。

イ) 林冠が閉鎖していること。

ウ) 伐採痕など人為的な攪乱痕跡がないこと。

エ) 林縁部からの光が入らない程度、林縁から離れていること。

オ) アセビ等の不嗜好性低木が低木層に優占している林分は避けること。

イ 調査時期は、植物の着葉期間を踏まえて、平成30年7月26日から10月下旬までの期間とした。

ウ 調査方法は、調査前に20m四方を設定し、調査箇所の中心点をL杭で明示し、GPSで調査地点を記録した。また、調査箇所の林相写真を撮影するとともに、コドラート内を歩き回って定められた項目に従って調査を行い、「ニホンジカによる森林植生衰退状況調査票」に記入した。

エ 希少植物

調査において「レッドデータブックやまぐち(山口県の絶滅のおそれのある野生生物(山口県2018.3改訂)」に掲載されている維管束植物でランクC(準絶滅危惧種)以上の植物の生育が確認された場合は、ハンディGPSによりその位置を記録し、種名、丈高、健全度、食害の有無等を記録した。

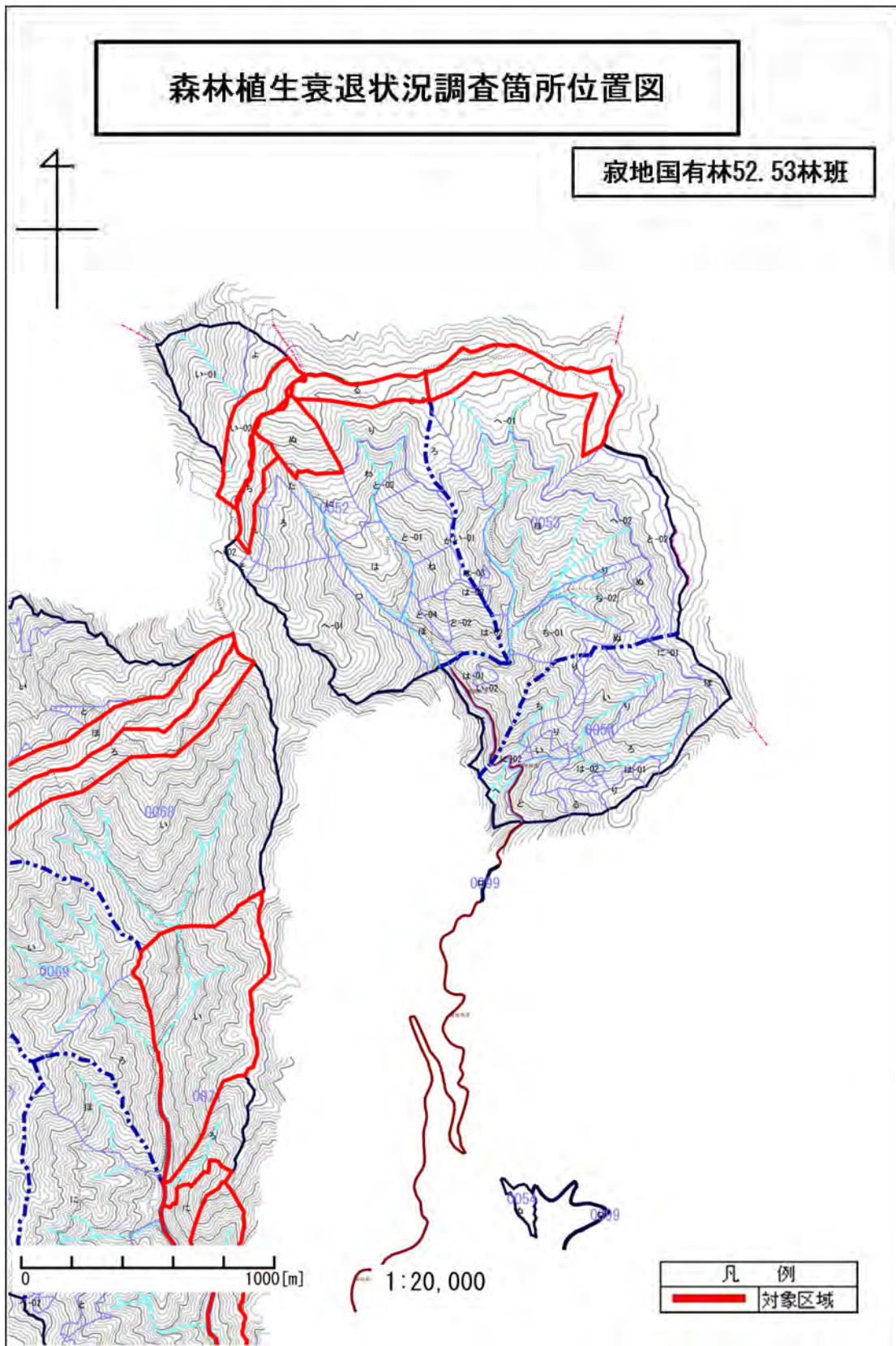


图 4.2.1 森林植生衰退状況調査箇所位置図(1) (寂地国有林)

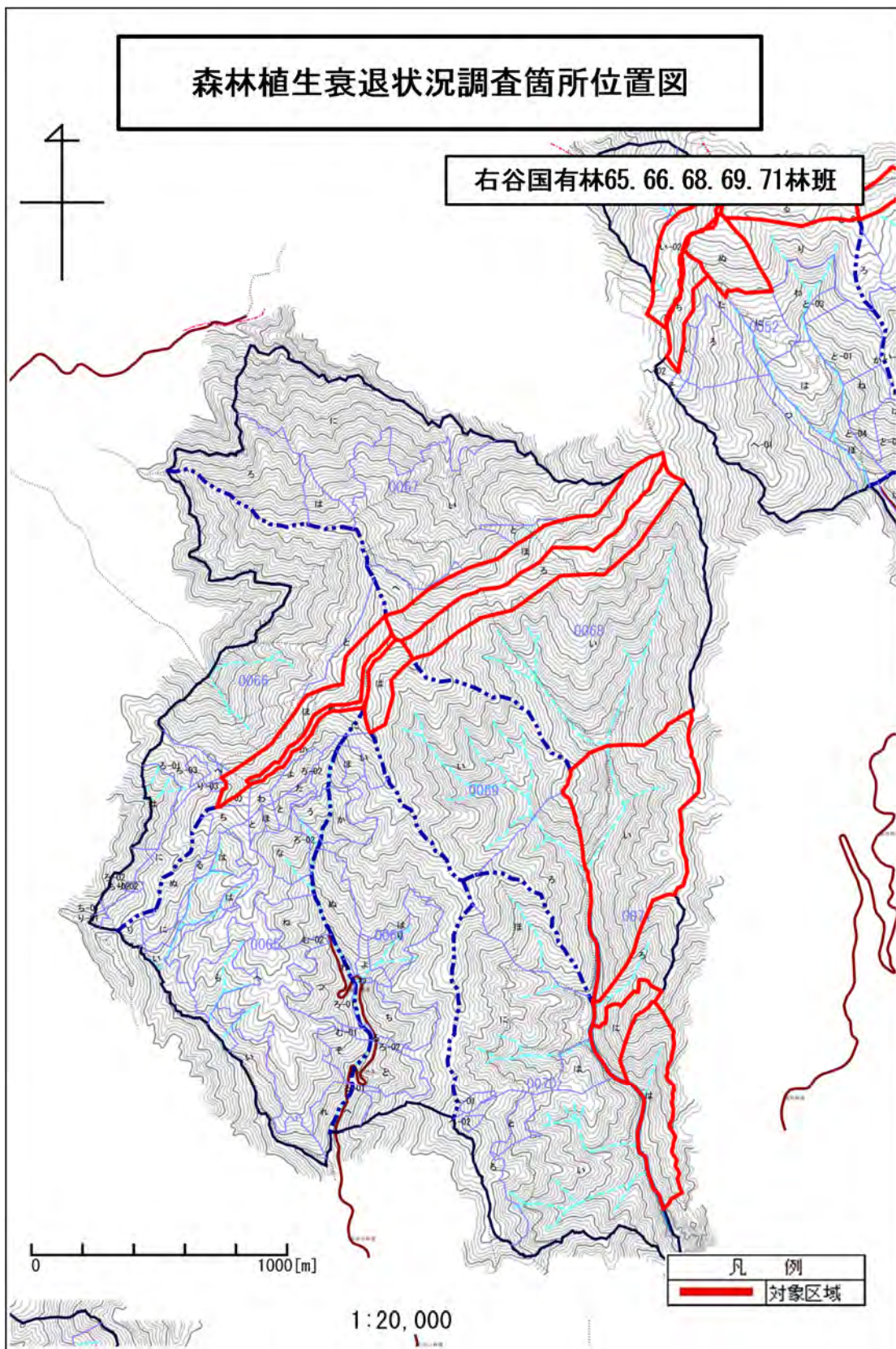


图 4. 2. 2 森林植生衰退状況調査箇所位置図 (2) (右谷国有林)

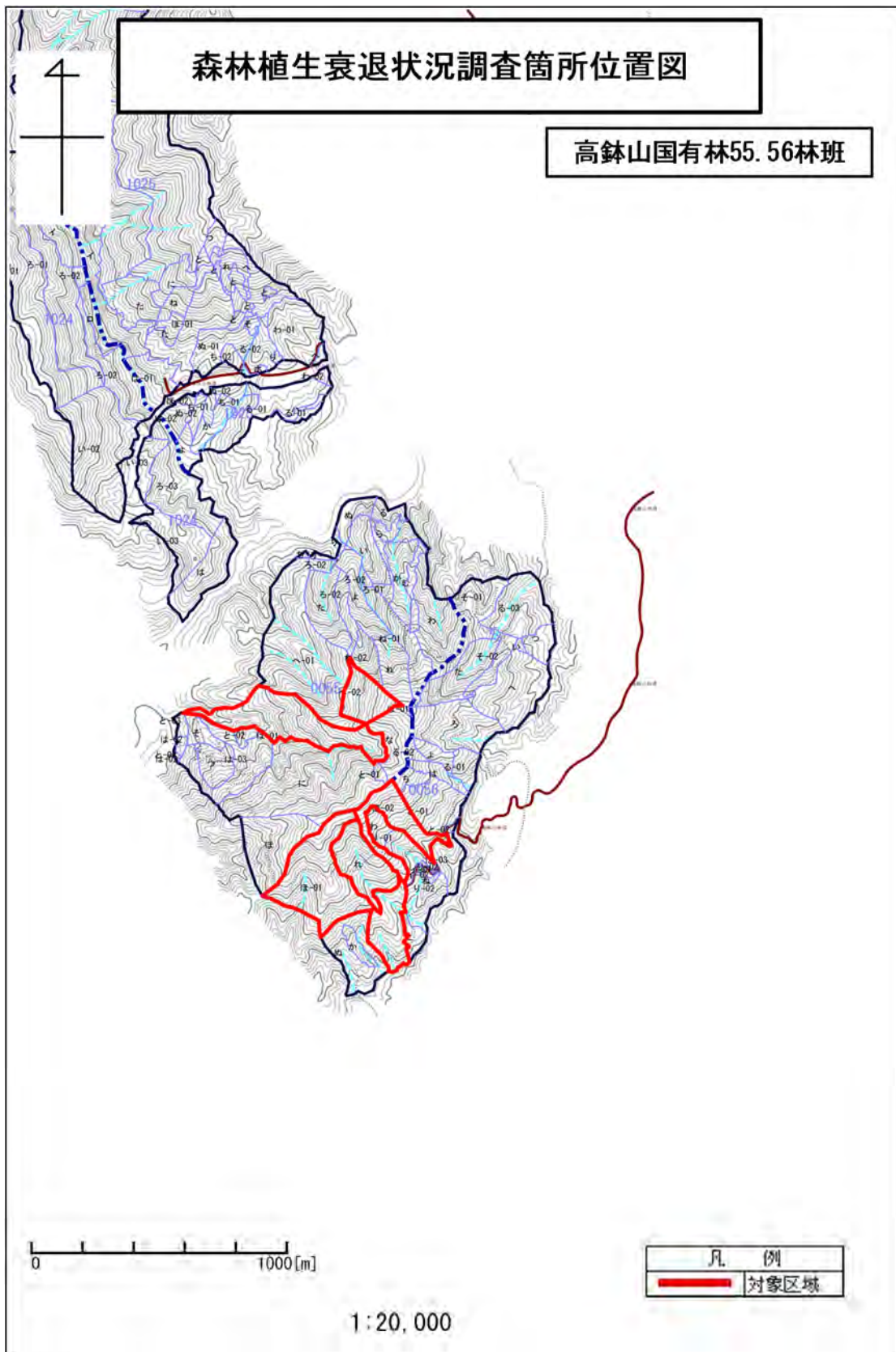


図 4.2.3 森林植生衰退状況調査箇所位置図(3) (高鉢山国有林)

4.3 自動撮影カメラの設置

捕獲することを念頭に置き、自動撮影カメラ設置箇所位置図(1)～(3)で、シカが生息する可能性が高いと想定される箇所に、それぞれ1箇所につき3台、計18台の自動撮影カメラを設置した。

図4.3.1～4.3.3に設置箇所を示す。

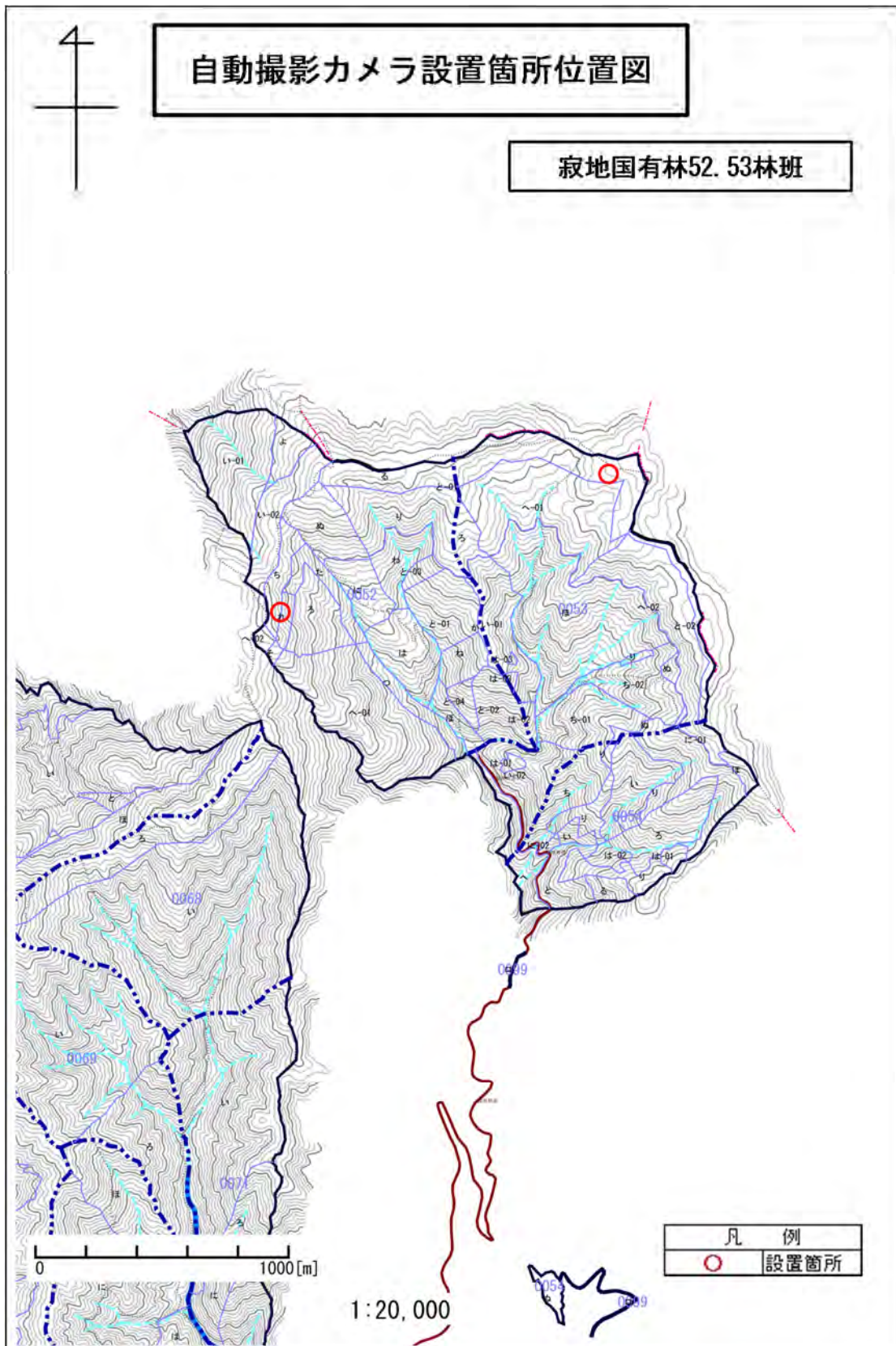


図 4. 3. 1 自動撮影カメラ設置箇所位置図(1) (寂地国有林)

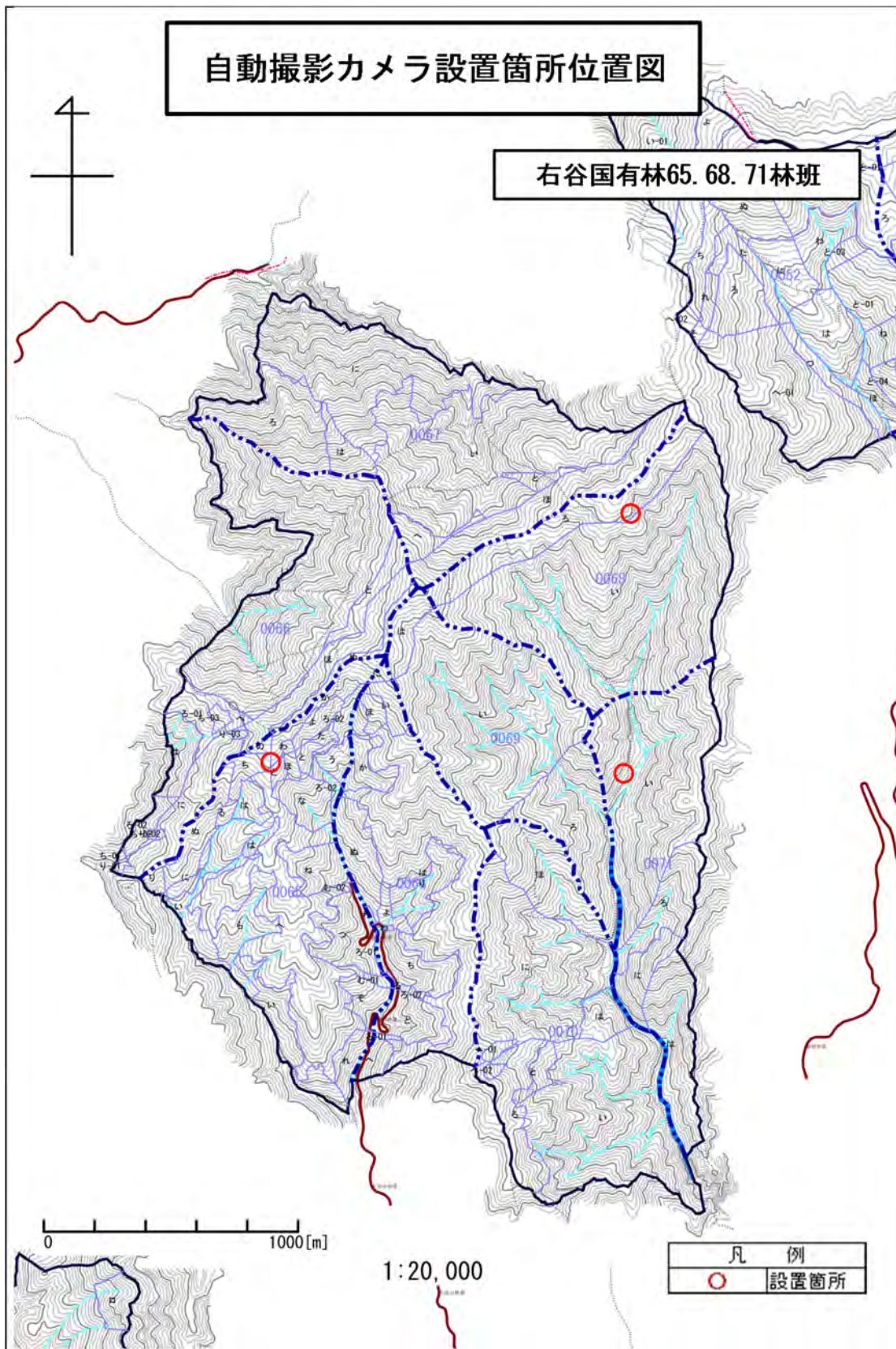


図 4.3.2 自動撮影カメラ設置箇所位置図(2) (右谷国有林)

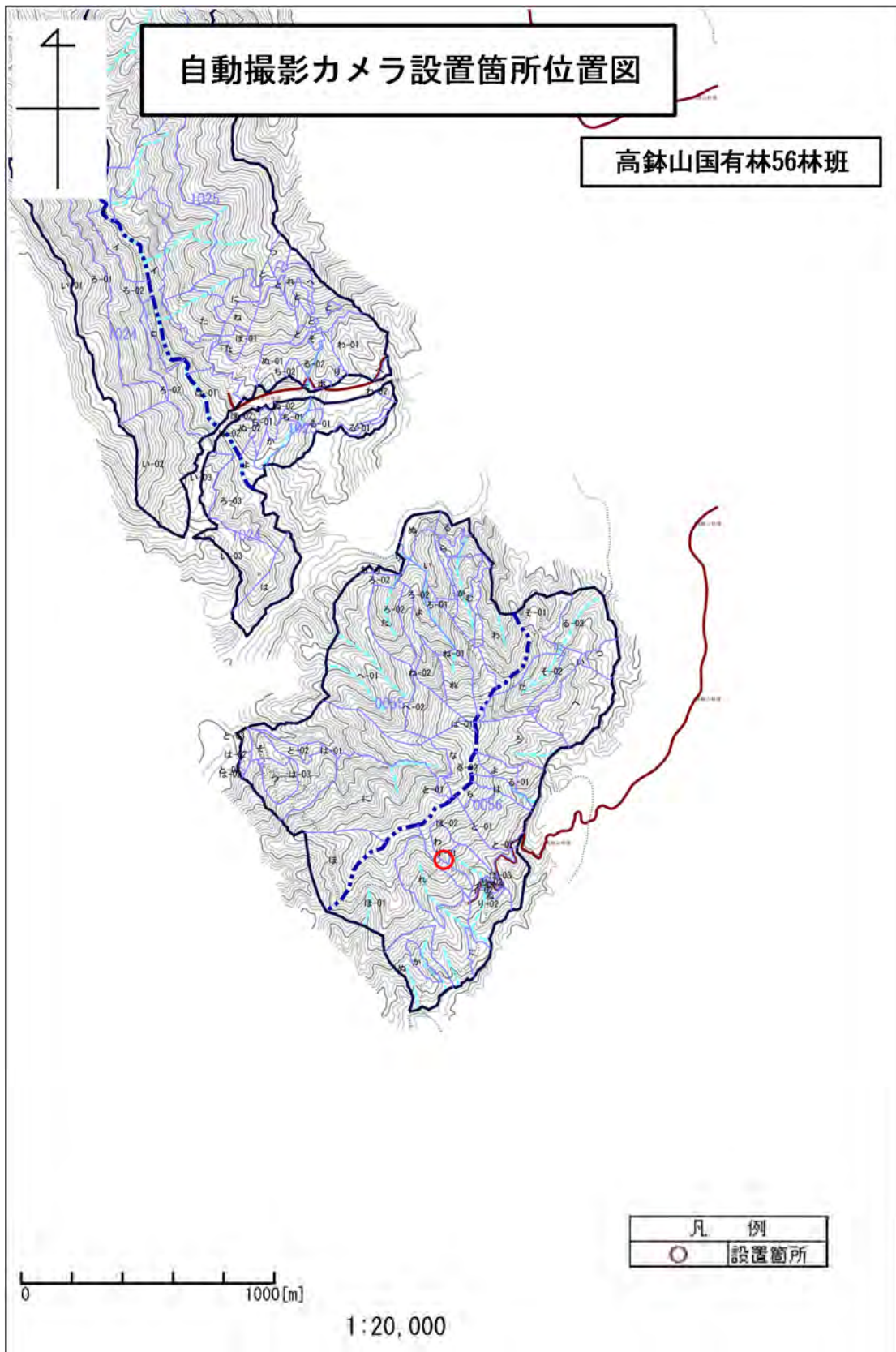


図 4. 3. 3 自動撮影カメラ設置箇所位置図(3) (高鉢山国有林)

5. 調査結果のとりまとめ及び考察

5.1 とりまとめ

調査結果を以下の通り整理した。

①調査地点の概要

②データの集計・整理

ア. 立地

イ. シカによる影響(樹皮剥ぎ、枝葉の食害)、ササ類の出現種、木本類の出現種(高木、亜高木、低木)

ウ. 草本類の出現種

エ. 実生・稚樹の発生状況

③糞塊数

④希少植物の有無及び被害状況

その際内容を理解しやすいように、図表や調査時に撮影した写真等を適宜挿入した。

5.2 考察

シカの生息に係る森林植生の衰退状況を検証、評価し、今後のシカからの影響について推定した。

6. 山口県におけるニホンジカの分布状況

レッドデータブックやまぐち(山口県の絶滅のおそれのある野生生物(山口県 2002年3月)によると、山口県に生息するニホンジカ(別名ホンシュウジカ)は「本州最西端に生息するとともに、ミトコンドリアDNAの解析により南日本型に分類される、数少ないホンシュウジカ個体群である。(中略)県内では県西部の豊田町を中心とし西は下関市、菊川町、豊北町から東は長門市、美祢市まで連続的に分布する。」とされている。個体数は乱獲等の影響により、昭和30年代前半には県北西部に50頭程度に減少したが、その後は保護政策により、農林業被害が深刻化するまでに増加した。このため、県では、平成9年3月に「シカ対策検討報告書」がとりまとめられ、それ以降平成11年からほぼ5年ごとに新たな管理計画を策定し、シカ個体群の管理を行っている。

山口県が刊行した「第4期第二種特定鳥獣(ニホンジカ)管理計画」(山口県 平成29年)によれば、シカの目撃情報は県北西部一帯の3市(下関市、長門市、美祢市)にまたがっているが、平成25年度には周辺の市(宇部市、山口市、萩市、山陽小野田市)などでも生息が確認され、近年、拡大する傾向にある。また、平成9年度から実施している糞塊密度調査では、主な生息域である県北西部一帯の3市は、ほとんど生息密度が高い地域になっており、生息域も拡大傾向にあるとされている。

今回調査の対象となった、寂地国有林、右谷国有林および高鉢山国有林はいずれも県東端部の岩国市(旧錦町)に位置している。図6.1に最近年の各国有林の周辺域を含むシカの分布状況を示す。上記の報告書では国有林は県の調査の対象から外れているが、いずれの国有林の隣接地域でもシカの目撃情報は得られていない。また、これらの地域では糞塊密度分布調査はこれまで実施されていない。しかし、平成25年、26年度の狩猟期間中の目撃情報では、3つの国有林の位置する旧錦町の西端付近で比較的多数の目撃情報が得られている。平成26年の目撃数は増加しており、県東部では特異的に目撃密度の高い地域となっている。この地区は城将山(827m)を最高所とする標高300~800mの山間地域であるが、錦川沿いが旧錦町(現岩国市)、旧美川町(現岩国市)の中心域となり、比較的人口が稠密な地域であることから多数の目撃情報が得られていると推察される。

調査対象国有林のうち、寂地国有林および右谷国有林は島根県、広島県との県境付近に位置し、殊に寂地国有林では最高所の寂地山を含む北西の主稜線が島根県、広島県との県境となっている。このような地理的条件から、隣接する両県のシカの生育情報が重要となる。いずれの県も山口県とほぼ同様式でシカの管理計画が策定されている。広島県においては、平成14年に第1期の管理計画が策定され、以降ほぼ5年ごとに新たな管理計画が策定され、シカ個体群の管理を行っている。平成29年に刊行した「第4期第二種特定鳥獣(ニホンジカ)管理計画」(広島県 平成29年4月)によれば、第1期の管理計画が策定された平成14年にはシカの分布域は県中央部と瀬戸内付近に限られていたが、急速に分布を拡大し、平成27年には分布は県中部のほぼ全体におよび、さらに周辺の高標高域でも分布が確認されるようになった。図6.2に広島県の最近年のシカの分布状況を示す。調査対象の国有林域は広島県西端の廿日市市(旧吉和町)に隣接している。廿日市市でも平成25年~27年にシカの分布が確認されているがいずれも3年間に1度確認された程度の低密度であり、国有林域に隣接する市北西部の県境域では分布情報は得られていない。また、島根県においても、平成15年3月に特定鳥獣(ニホンジカ)保護管理計画(第1期)を策定、その後以降ほぼ5年ごとに今後の保護管理のあり方について検討し諸対策を講じている。同県が平成29年に刊行した「第二種特定鳥獣(ニホンジカ)管理計画」(平成29年3月 島根県)によれば、中国山地地域ではほぼ全域でシカの分布が確認されている。図6.3に最近年の島根県のシカの分布状況を示す。調査対象の国有林域は島根県南西端の吉賀町(旧六日市町)に隣接している。

吉賀町では管理計画策定以降、平成 24 年に生息が確認されたのみでその後シカの分布は確認されていない。

これら、山口県および隣接する広島県、島根県のシカの分布情報から、今回の調査対象である寂地国有林、右谷国有林、高鉢山国有林を含む地域は、これまでシカの分布は確認されていない。しかし、高鉢山国有林の西側では比較的多数の目撃情報が得られている地域があり、今後の分布域拡大の動向が注視される。

表 6.1 各国有林(周辺域を含む)シカの分布状況

国有林名	シカの分布状況
寂地国有林	平成24年に島根県吉賀町でシカの生息が確認されたのみでその後は確認されていない。
右谷国有林	国有林の周辺では生息が確認されていない。
高鉢山国有林	平成25, 26年に国有林の周辺で生息が確認されている。

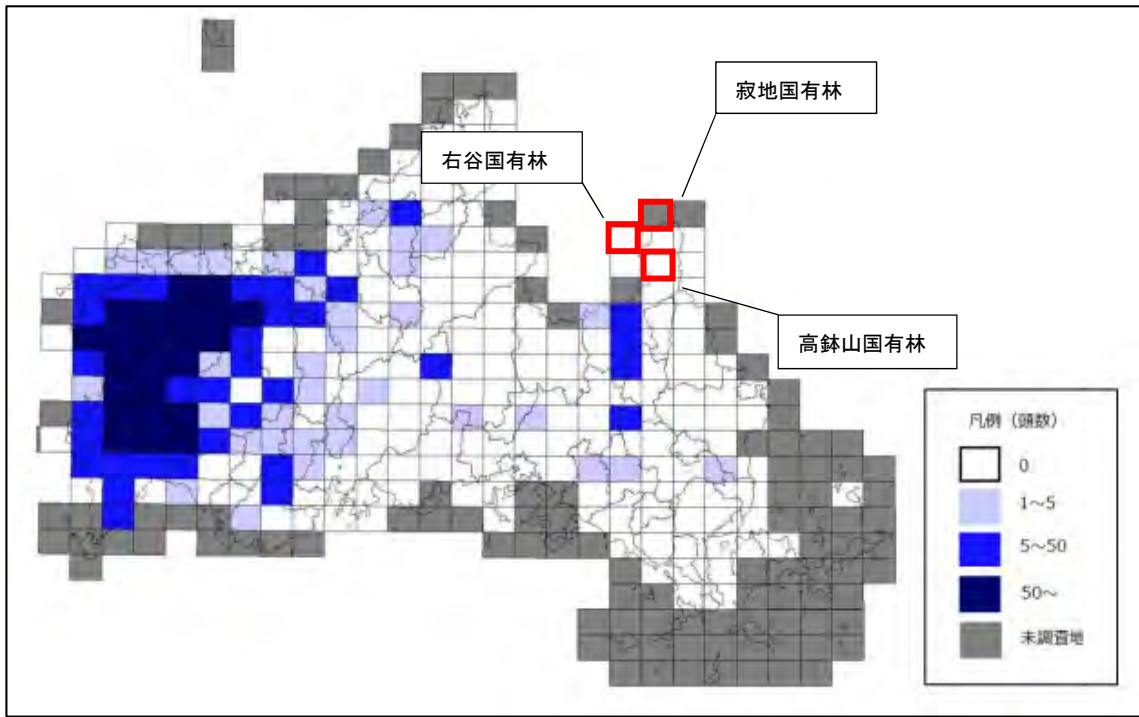


図 6.1 平成 26 年 山口県のシカ分布メッシュ図

※出典 第 4 期 第二種特定鳥獣(ニホンジカ)管理計画(山口県 平成 29 年 3 月)

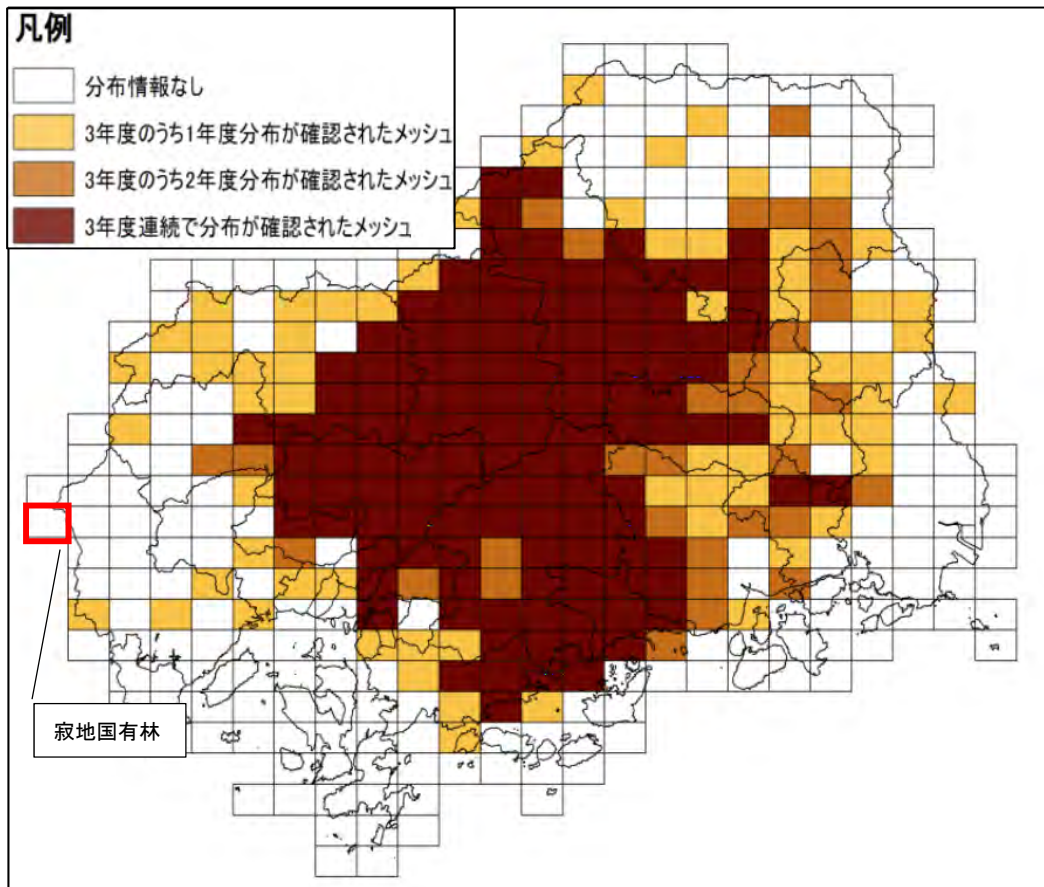


図 6.2 平成 25～27 年度の広島県のシカ分布メッシュ図 (出猟カレンダー調査による)

※出典 第 4 期 第二種特定鳥獣(ニホンジカ)管理計画(広島県 平成 29 年 4 月)

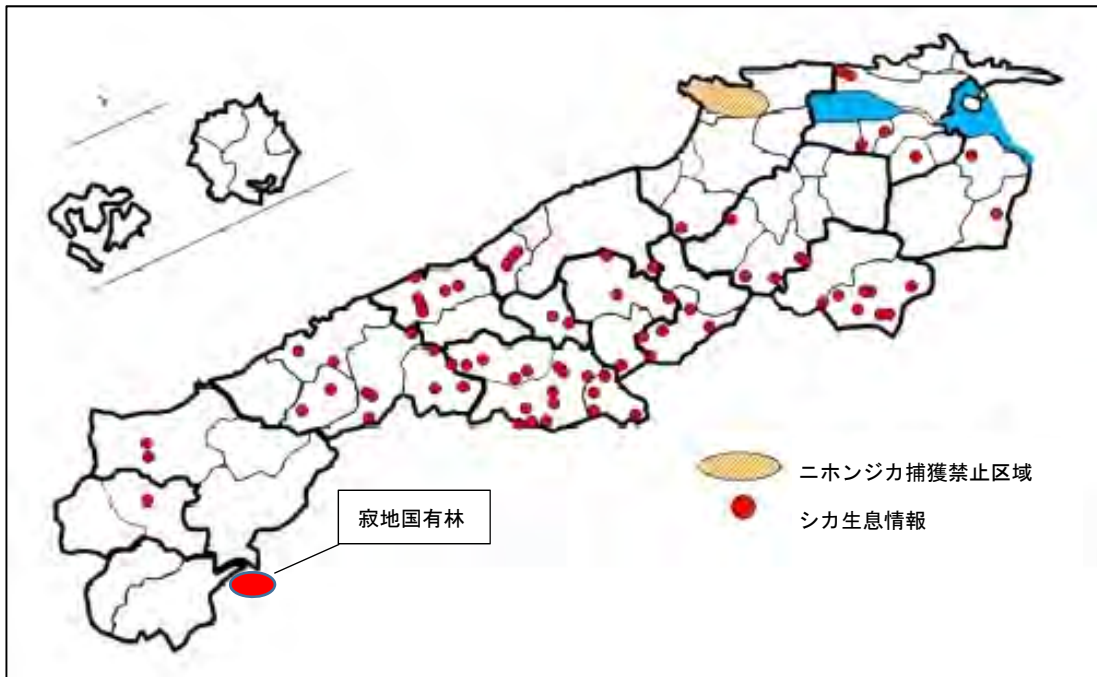


図 6.3 平成 26 年度に確認されたシカの生息情報

※出典 第二種特定鳥獣(ニホンジカ)管理計画(島根県 平成 29 年 3 月)

7. 調査結果

7.1 寂地国有林

7.1.1 調査地の概要

寂地国有林は県東部の岩国市(旧錦町)に位置している。島根県吉賀町、広島県廿日市市に隣接し、北東部の国有林界はその県境となっている。山口県側の岩国市錦町地区の年平均気温は 13.7℃、年間降水量は 2,200mm であるが、島根県側の吉賀町は平均気温 12.7℃、年間降水量は 1,820mm であり、冷涼で冬季は多量の積雪が見られる典型的な山陰型気候である。一帯は西中国山地西端部の、北は大佐山から南は羅漢山に至る冠山山地と呼ばれる地域にあり、国有林界の寂地山(1337m)を最高所とする稜線は山口県における最標高域である。国有林の面積は 258ha で、標高 1000~1300m の南西側山腹斜面付近に広がっている。

調査地の植生は天然林が 41%、人工林が 59%である。国有林界となる主稜線付近はブナの天然林が主体となっているが、寂地川源流域の標高 1000~1200m にかけての国有林南部斜面では、スギ・ヒノキ人工林が目立つものとなっている。写真 7.1.1.1 に代表的な植生を示す。当国有林内に分布する天然林は山口県におけるブナおよび天然スギの代表的群落として、山頂稜線付近の 76.93ha が「寂地山ブナ・スギ希少個体群保護林」に設定されており、さらに寂地山付近の稜線はカタクリの群生地として、これら植生の永続的な保護・管理が計られている。

寂地国有林の位置する冠山山地は西中国山地国定公園に指定されている。最高所である冠山から寂地山を通る主稜線は登山ルートも整備され、ふもとの寂地峡や犬戻し峡は新緑、紅葉の名所として訪問者も多く、山口県でも有数の景勝地となっている。



稜線部のブナ林



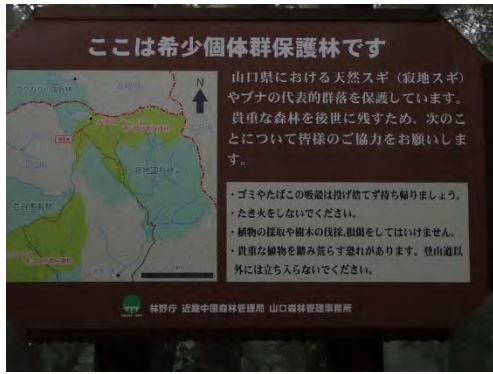
林床部のチマキザサ



稜線部のスギ人工林



斜面部のスギ人工林



保護林の案内看板



山頂付近のカタクリ群生地

写真 7.1.1.1 寂地国有林の代表的な植生

7.1.2 糞塊密度調査

図 7.1.2.1 に糞塊密度調査ラインを示す。調査ラインは 52-い-2 林小班、52-ぬ林小班と、52-ち林小班の林小班界から、52-る林小班、53-と-1 林小班の県界で、最高所の寂地山(1337m)を通る稜線上に位置している。ライン西端部を踏査始点とし区間距離は 2km である。調査ラインの植生はほぼブナ林で占められているが、始点付近はラインを設定した稜線がブナ林とスギ人工林の境界となっており、東端部の終点付近もラインの南側がヒノキ人工林でブナ林との境界となっていた。林床はチマキザサが密生していたが、ラインは登山ルートとほぼ重複していることから整備されており、概ね歩きながら地表部を目視観察することができた。

調査の結果、調査ライン上では糞塊は確認されなかった。さらに、樹皮剥ぎ、枝葉の食痕等のシカによる樹木被害も確認されなかった。(表 7.1.2.1)

表 7.1.2.1 寂地国有林糞塊密度調査ラインにおける糞塊確認数

ライン番号	糞塊確認数			
	旧	中	新	計
ライン①	0	0	0	0
計	0	0	0	0

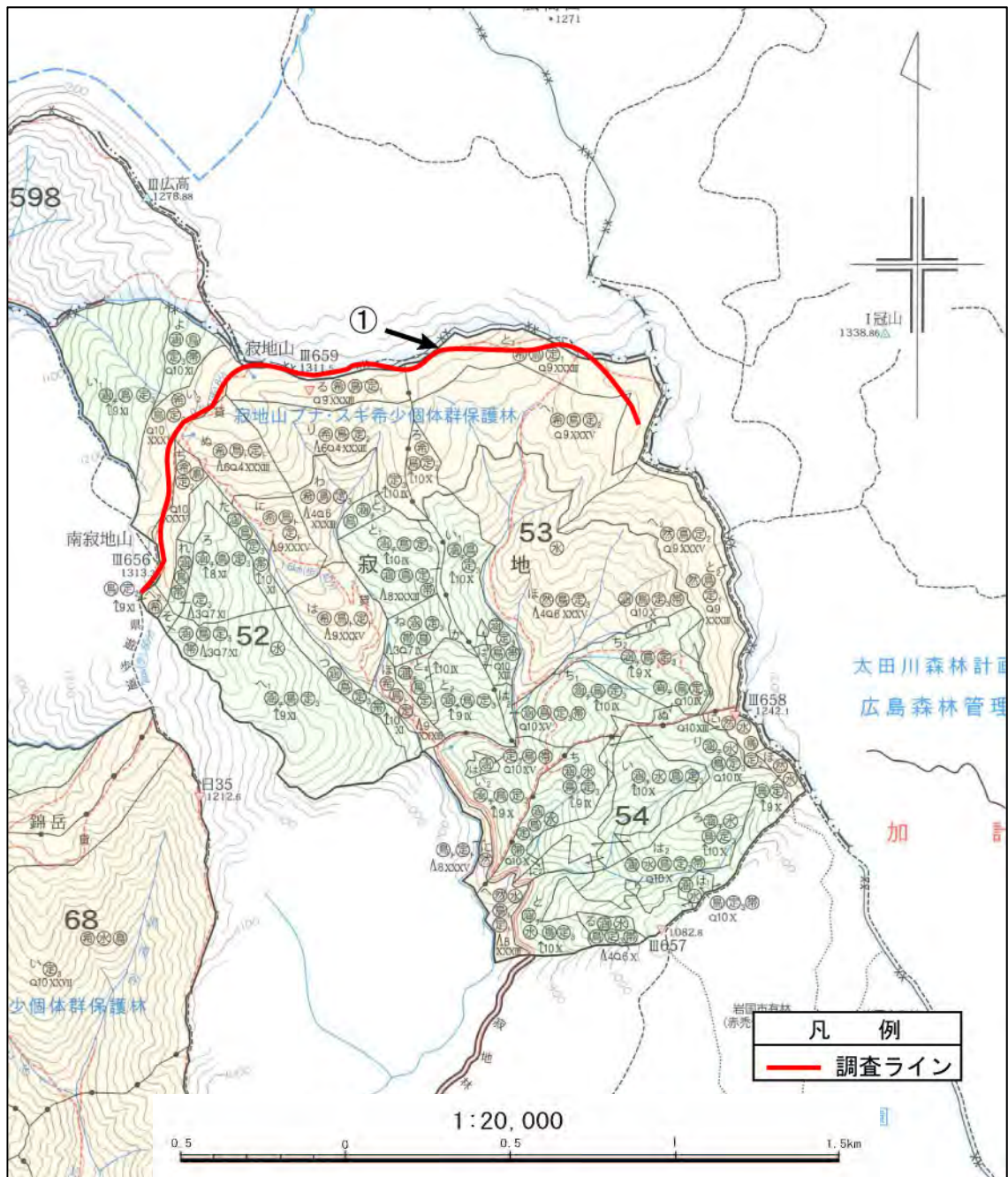


図 7.1.2.1 糞塊密度調査ライン位置図(寂地国有林)

7.1.3 森林植生衰退状況調査

森林植生衰退状況調査は1地点で、稜線部の52-ぬ林小班で実施した。図7.1.3.1に調査地点を示す。

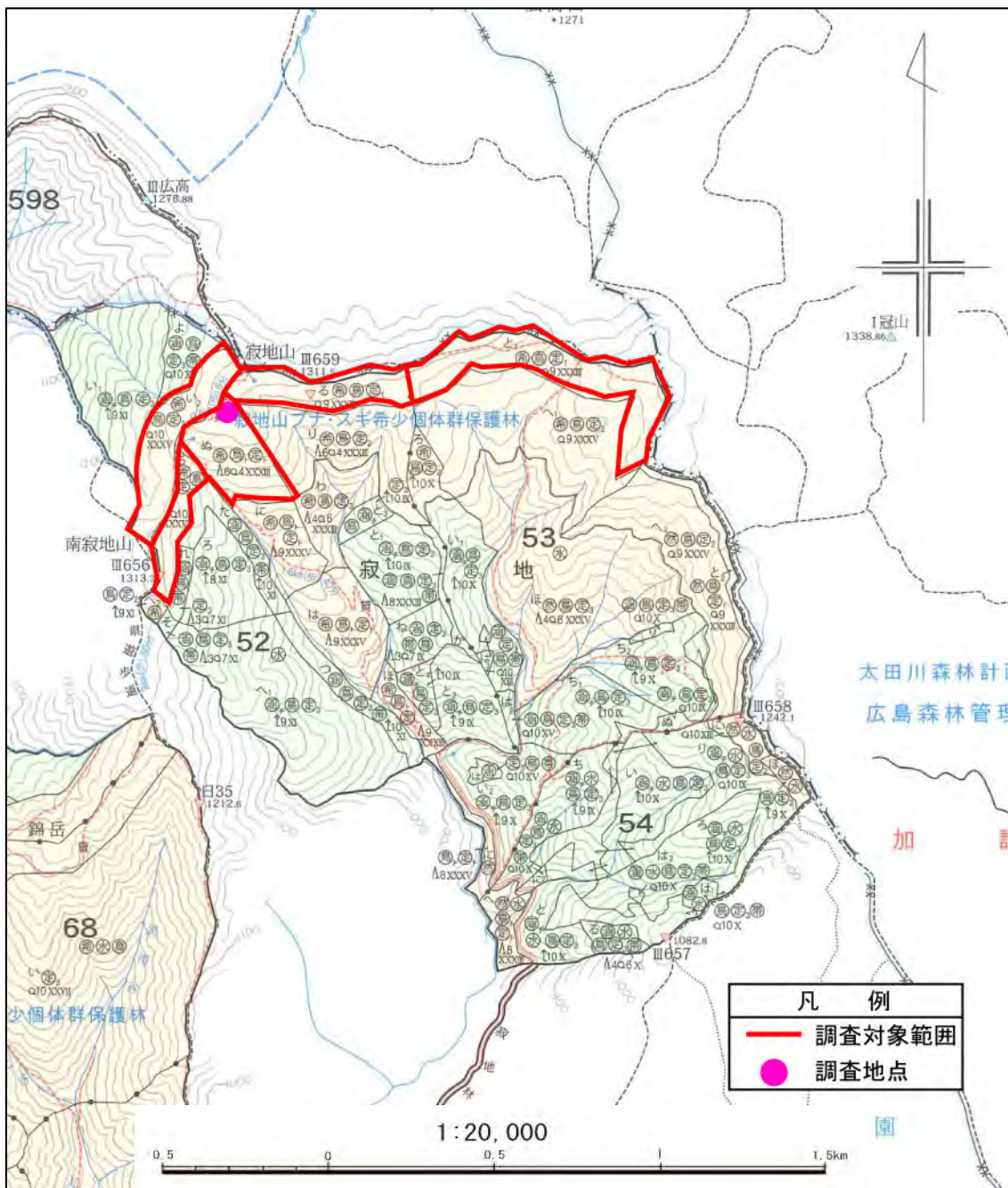


図 7.1.3.1 森林植生衰退状況調査位置図(寂地国有林)

立地は国有林最高所である寂地山(1337m)南面の稜線上でほぼ平坦な地形である。林分は高さ13m程度のブナを主構成種とする落葉広葉樹林である。高木層はブナ、コハウチワカエデなどが生育し、植被率は80%であった。林内はアオダモ、イヌツゲなどが50%の植被率で低木層を形成していた。林床部は概ねチマキザサが密生しており、スゲ類やマルバフユイチゴ、イヌツゲの稚樹などがその隙に疎らに生育していた。シカの採食植物としてアオダモ、タンナサワフタギ、イヌツゲ、チマキザ

サの生育が確認された。採食植物の判定については、「日本におけるニホンジカの採食植物・不嗜好性植物リスト」(橋本・藤木 2014)に準拠した。

調査の結果、この地点では樹皮剥ぎ、枝葉の食痕、ササ類の被食などのシカによる植生への影響は見られなかった。さらに、シカ糞、けもの道などの生息の痕跡も見られなかった。(表 7.1.3.1)

表 7.1.3.1 シカによる植生への影響

階 層	植被率 (%)	シカによる影響				
		被害個体の 割合 (%)	樹皮剥ぎ	樹勢の低下	枝葉の摂食	ディアライン の形成
高木層	80	0	なし	影響なし		
亜高木層	40	0	なし	影響なし		
低木層	50	0	なし	影響なし	なし	なし
草本層	90					
ササ層	0	0			なし	

7.1.4 自動撮影カメラの設置

寂地国有林では、53-と-1、52-ち林小班の2箇所に自動撮影カメラを設置した。

図 7.1.4.2 に設置地点を示す。

寂地国有林で自動撮影カメラにて撮影された個体には、鳥類はヤマドリとソウシチョウの2種、哺乳類ではニホンノウサギ、ホンドキツネなど6種が確認されたが、シカは確認されなかった。(表 7.1.4.1、図 7.1.4.1)

表 7.1.4.1 自動撮影カメラの結果(寂地国有林)

No.	綱名	目名	科名	種名	撮影回数
1	鳥 綱	キジ目	キジ科	ヤマドリ	1
2		スズメ目	チメドリ科	ソウシチョウ	1
3	哺乳綱	ウサギ目	ウサギ科	ニホンノウサギ	9
4		ネコ目(食肉目)	クマ科	ツキノワグマ	1
5			イヌ科	ホンドタヌキ	3
6			ホンドキツネ	5	
7			イタチ科	ホンドテン	1
8		ウシ目(偶蹄目)	イノシシ科	ニホンイノシシ	7
9	不 明				2
計	2綱	5目	7科	8種	30

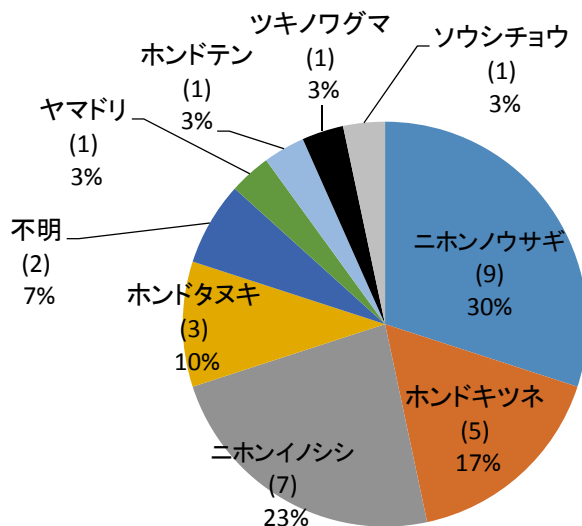


図 7.1.4.1 種別撮影回数の割合

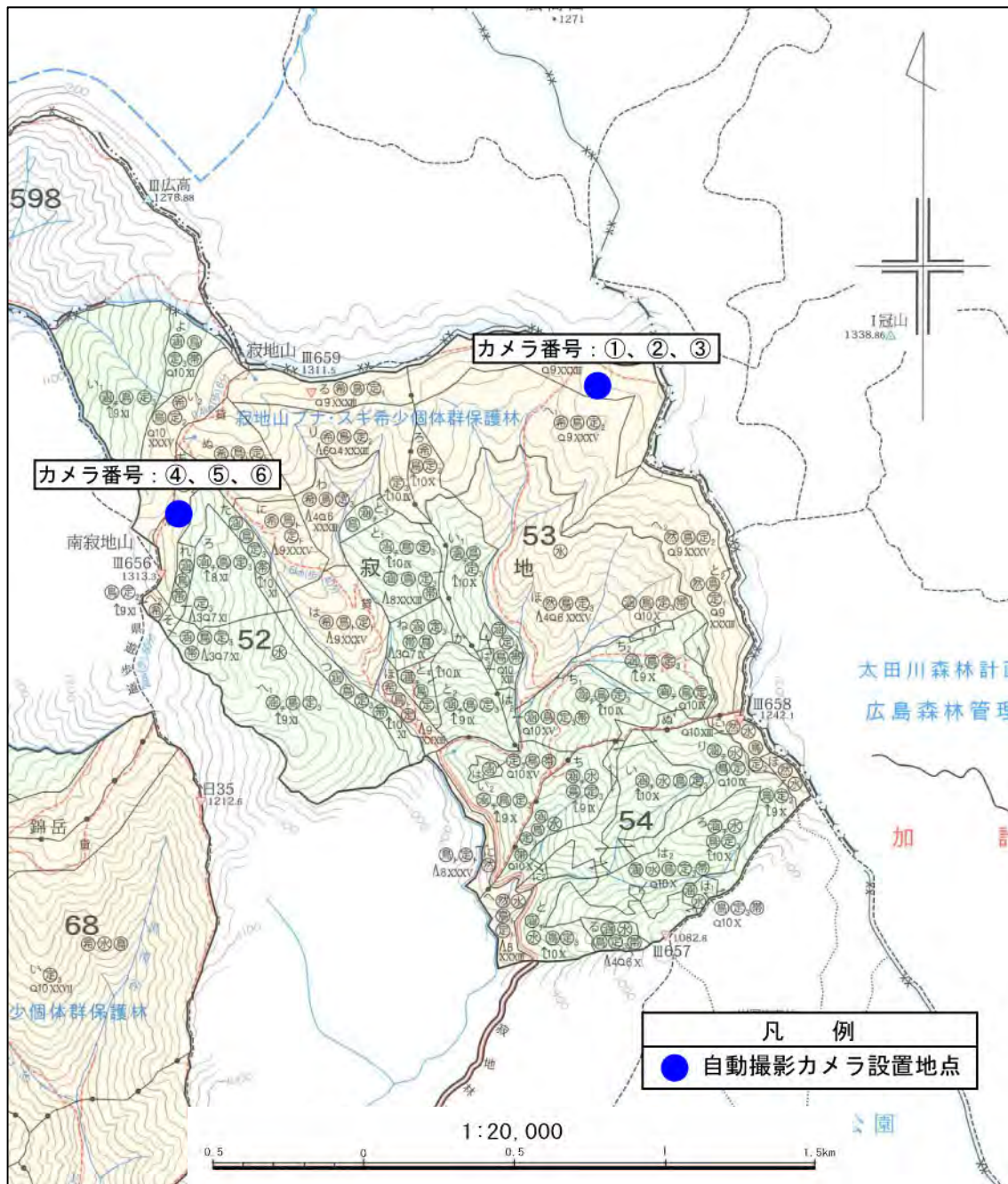


図 7.1.4.2 自動撮影カメラ設置地点(寂地国有林)

7.1.5 希少植物の確認状況

調査範囲では糞塊密度調査のルート周辺、森林植生衰退状況調査および自動撮影カメラ設置地点への移動中に、カラクサシダ、ヤシャビシヤク、ハスノハイチゴ、ウスゲタマブキ、エビネ属の一種、ミヤマウズラ、ヒナノウスツボの7種の希少植物(山口県レッドリスト 2018)の生育が確認された。また、寂地山周辺はカタクリの群生地であるが、調査期間である8月以降地上部はすでに消失しており、生育状況の確認はできなかった。図7.1.5.1に希少植物の確認地点を、表7.1.5.1に確認状況を示す。

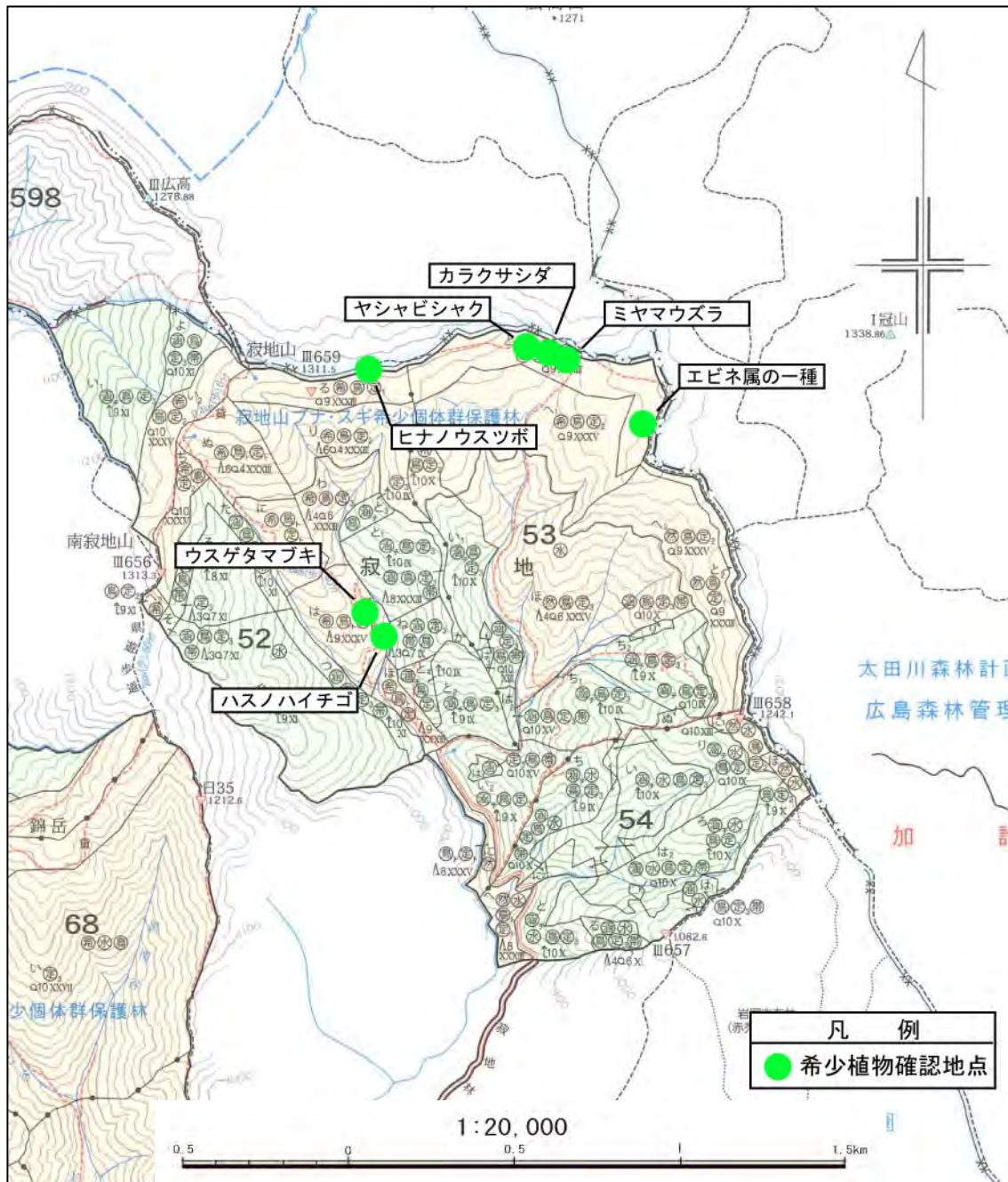




図 7.1.5.1 希少植物確認地点(寂地国有林)

表 7.1.5.1(1) 希少植物確認状況(寂地国有林)

1. 種名	カラクサシダ	
2. ランク	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	
3. 生態	ウラボシ科のシダ。夏季に一次的に落葉する。 湿度の高い深山の樹上や岩上に着生する。 長さは5cm程度で、コケの間に埋もれて生育する。 北海道から九州にかけて分布。	
4. 確認状況	確認箇所は1地点で15個体。糞塊調査ライン脇、コケの生えた岩上に着生。サイズは5cm。	
1. 種名	ヤシャビシャク	
2. ランク	絶滅危惧ⅠA類 (CR)	
3. 生態	ユキノシタ科の落葉小低木。 高さ10~30cm。冷温帯のブナ・ミズナラナなどの高木の樹上に着生する。 本州、四国、九州に分布し、県内では徳地町、鹿野町、錦町に生育が記録されている。 ブナ林の減少、盆栽用としての採取などで激減している。	
4. 確認状況	確認箇所は1地点で1個体。糞塊調査ライン脇、樹高15m程度のブナの上部樹冠に着生。サイズは30cm程度。	
1. 種名	ハスノハイチゴ	
2. ランク	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	
3. 生態	バラ科の落葉小低木。 高さ60~100cm、葉の長さ10~25cm。花期は6月。 冷温帯の深山の木陰に生育。 長野・愛知・福井以西の本州・四国・九州に分布。	
4. 確認状況	当該国有林には広範囲生育していると見られ、寂地林道終点からの移動経路および稜線の糞塊調査ラインを含めた登山道沿いにほぼ連続的に分布していた。	
1. 種名	ヒナノウスツボ	
2. ランク	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	
3. 生態	ゴマノハグサ科の多年草。 高さ40~100cm、葉の長さ10~25cm。花期は7~9月。 山地の湿潤な林床に生育。 関東以西の本州・四国・九州に分布。 北海道から九州にかけて分布。	
4. 確認状況	当該国有林には広範囲生育していると見られ、寂地林道終点からの移動経路および稜線の糞塊調査ラインを含めた登山道沿いにほぼ連続的に分布していた。	
1. 種名	ウスゲタマブキ	
2. ランク	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	
3. 生態	キク科の多年草。 高さは50~140cm。花期は8~10月。 山地の木陰に生育。 関東以西の本州、四国・九州に分布。	
4. 確認状況	確認箇所は1地点で1個体が確認された。糞塊調査ライン脇でブナ林の林床。高さは60cmで結実していた。	

表 7.1.5.1(2) 希少植物確認状況(寂地国有林)

1. 種名	エビネ属の一種	
2. ランク	サルメンエビネ・ナツエビネはGR、エビネはVU、キエビネはNT	
3. 生態	ラン科の多年草。 葉は根生し長さは2~5cmの葉が集まって互生する。花茎は高さ10~12cm。花期は4~5月で草丈は30~50cmになる。 丘陵から山地にかけての落葉広葉樹林の林床に生育。 本州・四国・九州に分布。 園芸目的の採取により大幅に減少している。	
4. 確認状況	確認箇所は1地点で1×1mの範囲に7個体が確認された。糞塊調査ライン脇。ブナ林の林床。根生葉のみでサイズは15~25cm程度。	
1. 種名	ミヤマウズラ	
2. ランク	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	
3. 生態	ラン科の多年草。 高さ4~6cm。葉の長さ10~25cm。花期は8~9月、花茎は10~12cmで花は茎頂の片側に並んで咲く。 山地の林床に生育。 北海道中部以南・本州・四国・九州に分布。	
4. 確認状況	確認箇所は1地点で1個体が確認された。糞塊調査ライン脇でブナ林の林床。高さは4cm。	

7.1.6 移動中のシカ被害の痕跡

糞塊密度調査、森林植生衰退状況調査および自動撮影カメラ設置等の移動中に、シカ個体の目撃、樹皮剥ぎ、枝葉の食痕等のシカの生息の痕跡が確認された場合は記録した。稜線に至る登山道の周辺や稜線上に設定した糞塊密度調査ルート付近では、シカの採食植物であるミズナラ、タラノキ、アオダモ、リョウブ、タンナサワフタギ、ガマズミ、チマキザサ、スギ、ヒノキの生育が確認されたが、植生への被害は見られなかった。採食植物の判定については、「日本におけるニホンジカの採食植物・不嗜好性植物リスト」(橋本・藤木 2014)に準拠した。

12月調査時には積雪が見られ、糞塊調査ラインと重複する登山道には多くの動物の足跡が残されていたが、シカの足跡は確認されなかった(写真7.1.6.1)。

調査の結果、調査ルートでは、樹皮剥ぎ、枝葉の食痕、ササ類の被食などのシカによる植生への影響は見られなかった。さらに、上記の足跡を含めて、シカ糞、けもの道などの生息の痕跡も確認されなかった。



写真 7.1.6.1 糞塊調査ライン雪上の哺乳類の足跡

7.1.7 寂地国有林におけるニホンジカの生息状況と森林被害の現況

寂地国有林においては、今回実施した糞塊密度調査および自動撮影カメラの設置による調査ではシカの生息は確認されなかった。また、森林植生衰退状況調査でもシカの植生への影響は確認されなかった。これらのことから判断して、現況では寂地国有林ではシカの侵入および定着はしていないと推察される。

7.2 右谷国有林

7.2.1 調査地の概要

右谷国有林は前節の調査対象地である寂地国有林の西側にほぼ隣接しており、全域が岩国市(旧錦町)に位置している。国有林の面積は 583ha で、寂地山から続く標高 1200m 前後の稜線が国有林を北東から南西に横断している。この稜線を挟んで標高 700~1200m の山腹斜面付近に位置し、主に南側斜面に大きく広がっている。

調査地の植生は天然林が 49%、人工林が 51%である。天然林は主に稜線付近および国有林の北東部にかけて分布しており、稜線の北側や南西部の谷沿いの斜面はスギ・ヒノキ人工林が目立つものとなっている。写真 7.2.1.1 に代表的な植生を示す。当国有林内に分布する天然林は山口県におけるブナ林の代表的群落として、標高 850~1250m にかけての山腹斜面上部から稜線付近の 118.24ha の区域が「右谷山ブナ希少個体群保護林」として設定されており、これら貴重な植生の永続的な保護・管理が計られている。

右谷国有林も寂地国有林と同じく西中国山地国定公園に指定されている。右谷山(1234m)を通る主稜線は登山ルートも整備され、ふもとの寂地峡や浦石峡は新緑、紅葉の名所として訪問者も多く、山口県でも有数の景勝地となっている。



溪谷部のスギ人工林



溪谷部の落葉樹林



稜線部のヒノキ人工林



稜線部のブナ林



保護林の案内看板



稜線部林床のチマキザサ

写真 7.2.1.1 右谷国有林の代表的な植生

7.2.2 糞塊密度調査

糞塊密度調査は2箇所に調査ラインを設定した。図7.2.2.1にラインを示す。

調査ライン②は主稜線を通る踏査ルート上に設定した。稜線の北側は67-ほ、66-ぬ林小班、南側は68-ろ、69-は、65-の林小班でラインはその林班界を通っている。ラインは東端部を踏査始点とし区間距離は2.3kmである。始点付近から中間部1km付近はほぼブナの卓越する落葉広葉樹高木林であった。中間部以降はヒノキの混生する林分が見られるようになり、1.5km付近の右谷山山頂付近から終点部にかけてはラインの南側が概ねヒノキ人工林となっていた。終点付近では北側の斜面部はコハウチワカエデ、ウリハダカエデなどのカエデ類を主構成種とする高さ10m以下の樹高の低い樹林が広がっていた。稜線の林床はチマキザサが密生していたが、ラインは登山ルートとほぼ重複していることから整備されており、概ね歩きながら地表部を目視観察することができた。

調査ライン③は寂地川の支流で寂地峡と称される渓谷を通る踏査ルート上に設定した。谷の西側は69-ろ、70-に、70-は、70-い林小班、東側は71-い、71-ろ、71-は、71-に林小班でラインはその林班界に沿った登山道に設定されている。ラインは下流南端部を始点とし、谷川に沿って北上する延長2kmの区間である。渓谷の植生は区間を通してミズナラ、ブナ、ケヤキ、ハリギリなどを主構成種とする高木性の落葉広葉樹林が分布していたが、その下層はウラジロガシ、アラカシなどの常緑広葉樹が目立つものとなっていた。林床の植生は比較的密度が低く、ヤマソテツ、オオキジノオなどのシダ類やスゲ類、ヒサカキ、ウチダシツルシキミ、ハイイヌガヤなどの常緑小低木が疎らに生育していた。中間部0.9km付近では調査ラインはスギ人工林中を通り、以降渓谷の東斜面部はスギ人工林が目立つものとなっていた。谷川に沿って設定された調査ラインは登山ルートとほぼ重複していることから整備されており、概ね歩きながら地表部を目視観察することができた。1.6km付近から終点にかけての調査ラインは尾根上に設定されている。尾根はミズナラ、アカマツ、ミズメなどが生育する高木林であった。林内はアセビ、リョウブなどが枝を這わせ、移動の困難なほど地表部に密生していた。林内の植生状況から尾根上の調査ラインは直線的には進めずジグザクな形のものとなった。

調査の結果、調査ライン②、調査ライン③上ではともに糞塊は確認されなかった。さらにラインの周囲を含めて、樹皮剥ぎ、枝葉の食痕等のシカによる樹木被害も確認されなかった。(表7.2.2.1)

表7.2.2.1 右谷国有林糞塊密度調査ラインにおける糞塊確認数

ライン番号	糞塊確認数			
	旧	中	新	計
ライン②	0	0	0	0
ライン③	0	0	0	0
計	0	0	0	0

7.2.3 森林植生衰退状況調査

森林植生衰退状況調査は稜線部と溪谷部の2地点で実施した。図7.2.3.1に調査地点を示す。

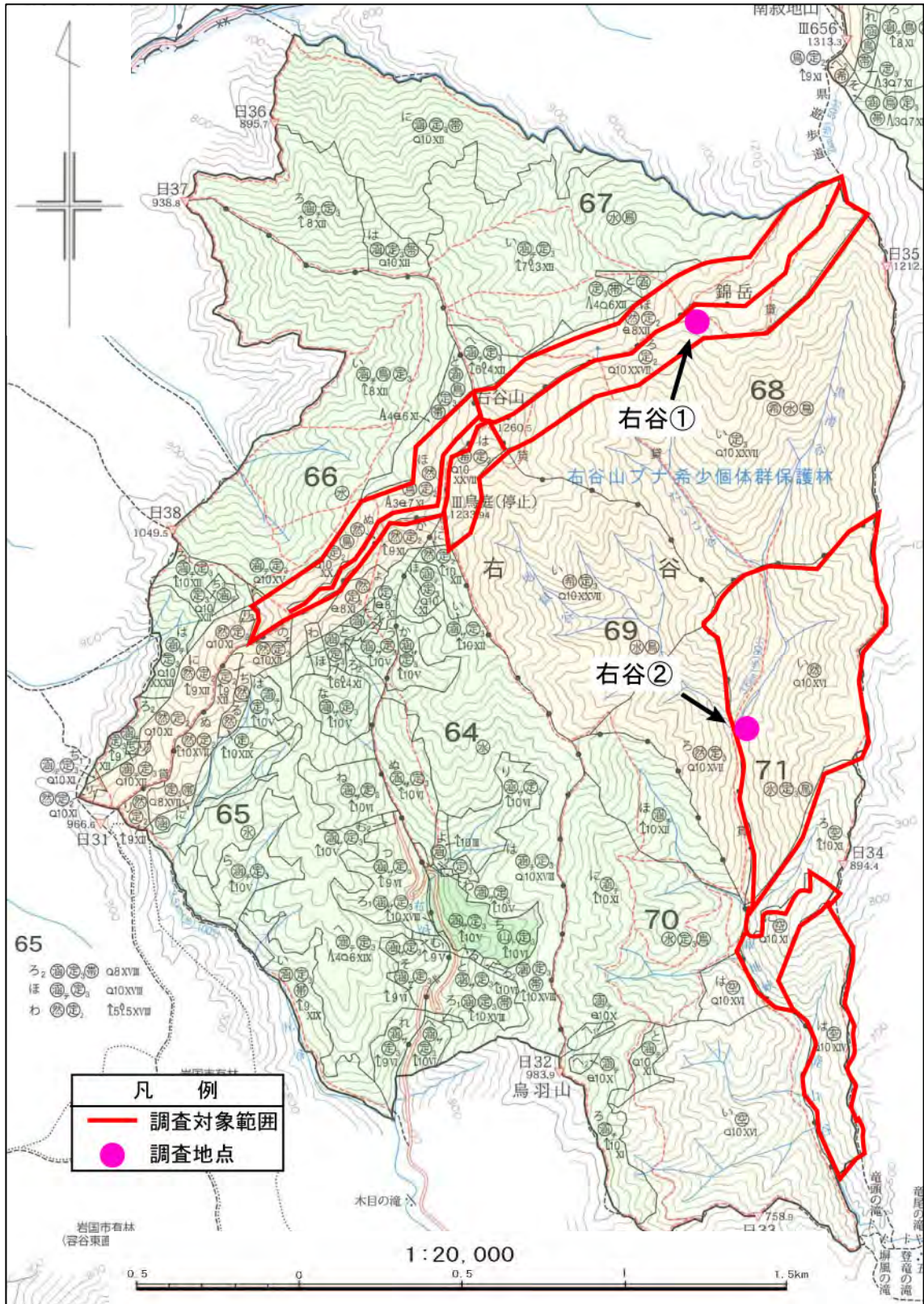


図 7.2.3.1 森林植生衰退状況調査位置図(右谷国有林)

稜線部の調査地点(右谷①)は68-ろ林小班に設定した。立地は1235mのピーク南側の比較的急な斜面である。林分は高さ15m程度のブナが卓越して生育する落葉広葉樹林であった。高木層はブナ、ミズナラなどが生育していたが、立木の密度は低く植被率は60%程度であった。林内はタンナサワフタギ、コゴメウツギなどが15%程度の植被率で疎らに生育していた。林床部は概ねチマキザサが密生し、スゲ類や、ウチダシツルシキミ、イヌツゲの稚樹などがその隙に疎らに生育していた。調査枠内ではシカの採食植物としてミズナラ、アオダモ、タンナサワフタギ、チマキザサの生育が確認された。採食植物の判定については、「日本におけるニホンジカの採食植物・不嗜好性植物リスト」(橋本・藤木 2014)に準拠した。

調査の結果、この地点では樹皮剥ぎ、枝葉の食痕、ササ類の被食などのシカによる植生への影響は見られなかった。さらに、シカ糞、けもの道などの生息の痕跡も見られなかった。

溪谷部の調査地点(右谷②)は71-い林小班に設定した。立地は溪谷東斜面下部の急傾斜地である。林分は樹高が18m程度で、クリ、ミズナラなどを主構成種とする落葉広葉樹林である。高木層の植被率は80%で立木密度は比較的高かった。林内はヤマモミジの稚樹やハイイヌガヤなどが5%程度の植被率でごく疎らに生育している程度であった。林床部はチマキザサが優占していたが、調査枠の中心付近ではササの生育は疎らで、ハイイヌガヤやスゲ類の生育が目立つものとなっていた。調査枠内ではシカの採食植物としてミズナラ、ヒサカキ、チマキザサの生育が確認された。

調査の結果、この地点では樹皮剥ぎ、枝葉の食痕、ササ類の被食などのシカによる植生への影響は見られなかった。さらに、シカ糞、けもの道などの生息の痕跡も見られなかった。

表 7.2.3.1 シカによる植生への影響

右谷①

階 層	植被率 (%)	シカによる影響				
		被害個体の割合 (%)	樹皮剥ぎ	樹勢の低下	枝葉の摂食	ディアラインの形成
高木層	60	0	0	影響なし		
亜高木層	35	0	0	影響なし		
低木層	15	0	0	影響なし	なし	なし
草本層	75					
ササ層	70	0			なし	

右谷②

階 層	植被率 (%)	シカによる影響				
		被害個体の割合 (%)	樹皮剥ぎ	樹勢の低下	枝葉の摂食	ディアラインの形成
高木層	80	0	0	影響なし		
亜高木層	45	0	0	影響なし		
低木層	5	0	0	影響なし	なし	なし
草本層	75					
ササ層	50	0			なし	

7.2.4 自動撮影カメラの設置

右谷国有林では、68-ろ、65-か、71-い林小班の3箇所に自動撮影カメラを設置した。

図7.2.4.2に設置地点を示す。

右谷国有林で自動撮影カメラにて撮影された個体には、鳥類はヤマドリ、キビタキの2種、哺乳類はホンドタヌキ、ニホンイノシシなど4種でシカは確認されなかった。

また、撮影回数ではホンドタヌキとニホンイノシシが大半を占めた。

(表7.2.4.1、図7.2.4.1)

表7.2.4.1 自動撮影カメラの結果(右谷国有林)

No.	綱名	目	科	種	撮影回数
1	鳥 綱	キジ目	キジ科	ヤマドリ	1
2		スズメ目	ヒタキ科	キビタキ	1
3	哺乳綱	ウサギ目	ウサギ科	ニホンノウサギ	1
4		ネコ目(食肉目)	イヌ科	ホンドタヌキ	35
5			イタチ科	ニホンアナグマ	2
6		ウシ目(偶蹄目)	イノシシ科	ニホンイノシシ	17
計	2綱	5目	6科	6種	57

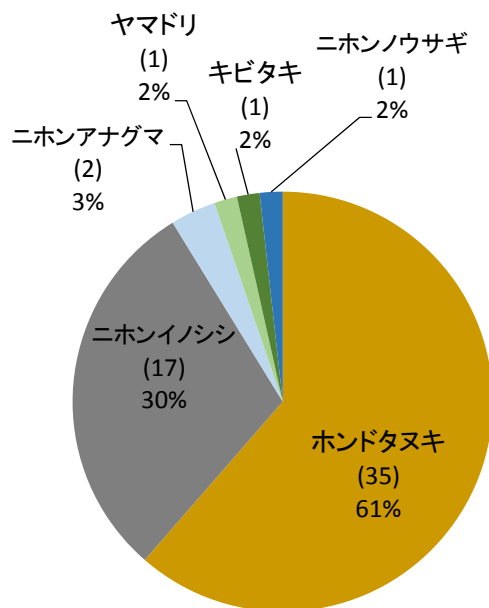


図7.2.4.1 種別撮影回数の割合

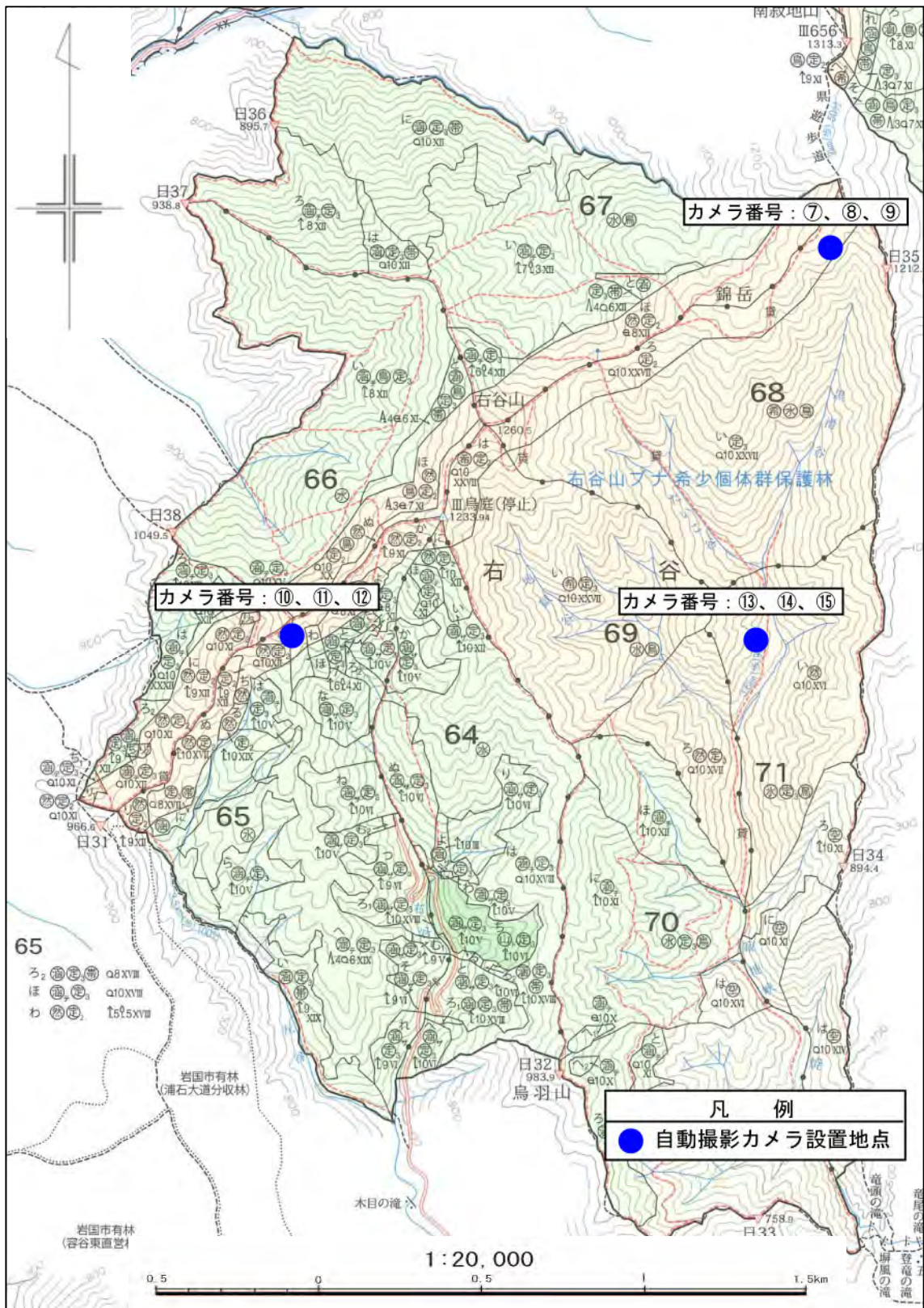


図 7.2.4.2 自動撮影カメラ設置地点(右谷国有林)

7.2.5 希少植物の確認状況

調査範囲では糞塊密度調査のルート周辺、森林植生衰退状況調査および自動撮影カメラ設置地点への移動中に、ハスノハイチゴ、ウスゲタマブキの2種の希少植物(山口県レッドリスト2018)の生育が確認された。図7.2.5.1に希少植物の確認地点を示し、確認状況を表7.2.5.1に示した。

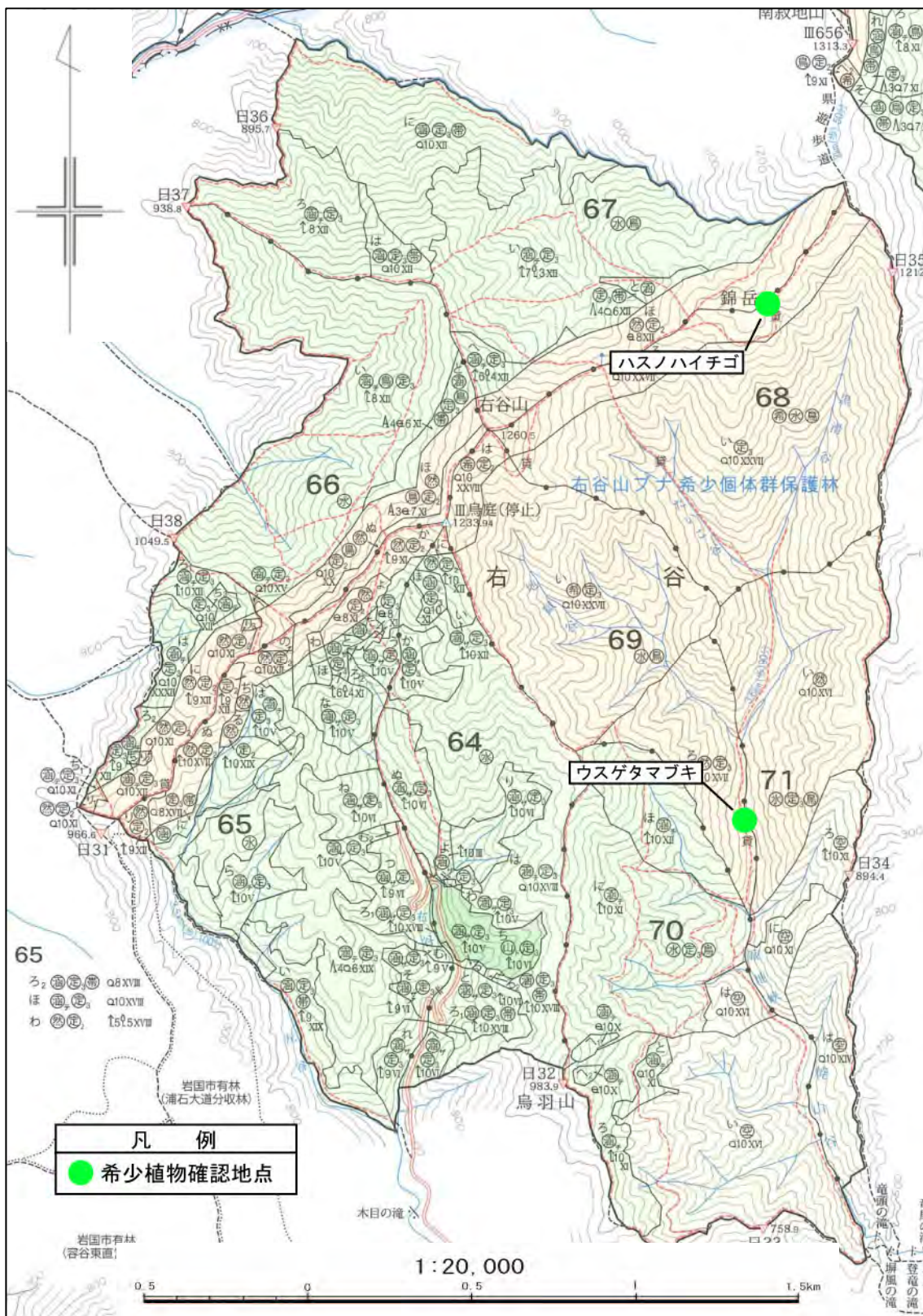




図 7.2.5.1 希少植物確認地点(右谷国有林)

表 7.2.5.1 希少植物の確認状況

1. 種名	ハスノハイチゴ	
2. ランク	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	
3. 生態	<p>バラ科の落葉小低木。</p> <p>高さ60～100cm、葉の長さ10～25cm。花期は6月。</p> <p>冷温帯の深山の木陰に生育。</p> <p>長野・愛知・福井以西の本州・四国・九州に分布。</p> <p>北海道から九州にかけて分布。</p>	
4. 確認状況	当該国有林には広範囲生育していると見られ、糞塚調査ライン稜線のブナ林下の登山道沿いにほぼ連続的に分布していた。	
1. 種名	ウスゲタマブキ	
2. ランク	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	
3. 生態	<p>キク科の多年草。</p> <p>高さは50～140cm。花期は8～10月。</p> <p>山地の木陰に生育。</p> <p>関東以西の本州、四国・九州に分布。</p>	
4. 確認状況	確認箇所は1地点で、寂地峽登山道の途中のコンクリート路側帯上で1個体の生育を確認。高さ40cm、花期で紫色の頭花が見られた。	

7.2.6 移動中のシカ被害の痕跡

糞塊密度調査、森林植生衰退状況調査および自動撮影カメラ設置等の移動中に、シカ個体の目撃、樹皮剥ぎ、枝葉の食痕等のシカの生息の痕跡が確認された場合は記録した。稜線に至る登山道の周辺や稜線上に設定した糞塊密度調査ルート付近では、シカの採食植物であるミズナラ、タラノキ、アオダモ、リョウブ、タンナサワフタギ、ガマズミ、チマキザサ、スギ、ヒノキの生育が確認されたが、植生への被害は見られなかった。採食植物の判定については、「日本におけるニホンジカの採食植物・不嗜好性植物リスト」(橋本・藤木 2014)に準拠した。

12月調査時には積雪が見られ、糞塊調査ラインと重複する登山道には多くの動物の足跡が残されていたが、シカの足跡は確認されなかった(写真7.2.6.1)。

調査の結果、調査ルートでは、樹皮剥ぎ、枝葉の食痕、ササ類の被食などのシカによる植生への影響は見られなかった。さらに、上記の足跡を含めて、シカ糞、けもの道などの生息の痕跡も確認されなかった。



写真 7.2.6.1 糞塊調査ライン雪上の哺乳類の足跡

7.2.7 右谷国有林におけるニホンジカの生息状況と森林被害の現況

右谷国有林においては、今回実施した糞塊密度調査および自動撮影カメラの設置による調査ではシカの生息は確認されなかった。また、森林植生衰退状況調査でもシカの植生への影響は確認されなかった。これらのことから判断して、現況では右谷国有林ではシカの侵入および定着はしていないと推察される。

7.3 高鉢山国有林

7.3.1 調査地の概要

高鉢山国有林は前節の寂地国有林および右谷国有林から宇佐川を挟んで南2.5kmに位置しており、全域が岩国市(旧錦町)に含まれる。国有林の面積は158haで、最高所の高鉢山(706m)を中心にして標高350~700mの山腹斜面付近に広がっている。

調査地の植生は天然林が22%、人工林が78%である。天然林は北西斜面を宇佐川に流下する橋ヶ谷および悪谷斜面部の大規模な林分を除いては、スギ・ヒノキ人工林中に小規模な林分がモザイク状に分布する程度である。天然林は落葉広葉樹であるコナラ林と常緑針葉樹であるアカマツ林が分布するが、概ねこれらアカマツとコナラの混交林分が主体となっている。写真7.3.1.1に代表的な植生を示す。高鉢山国有林は、広島県との県境となる冠山山地南端部で羅漢山を代表的な景勝地とする羅漢山県立自然公園に全域が含まれている。



写真 7.3.1.1 高鉢山国有林の代表的な植生

7.3.2 糞塊密度調査

図 7.3.2.1 に糞塊密度調査ラインを示す。調査ラインの始点は、高鉢山林道終点付近からの尾根の登り口である。尾根の調査ラインは 56-ほ-1 林小班と 56-ほ-2 林小班の境界に設定されており、上端で主稜線に合流する。稜線部の調査ラインは 55 林班と 56 林班の林班界を通り、最高所の高鉢山(706m)からは 55 林班中の北西部の尾根に沿って終点の国有林界に至るもので、区間距離は 2km である。調査ライン始点からの尾根はほぼスギ人工林であった。稜線部は概ねコナラとアカマツの混交林が続いていたが、高鉢山より北西部は稜線が天然林と人工林の境界となっており、調査ラインはこの植生境界を通過していた。稜線部は林床の植生が貧弱で概ね歩きながら地表部を目視観察することができたが、低木が密生して林内が藪状になっていた区間では、地表部は開けているものの直線的には進めずラインの一部がジグザクな形のものとなった。

調査の結果、調査ライン④上での糞塊は確認されなかった。さらに、樹皮剥ぎ、枝葉の食痕等のシカによる樹木被害も確認されなかった。

表 7.3.2.1 高鉢山国有林糞塊密度調査ラインにおける糞塊確認数

ライン番号	糞塊確認数			
	旧	中	新	計
ライン④	0	0	0	0
計	0	0	0	0

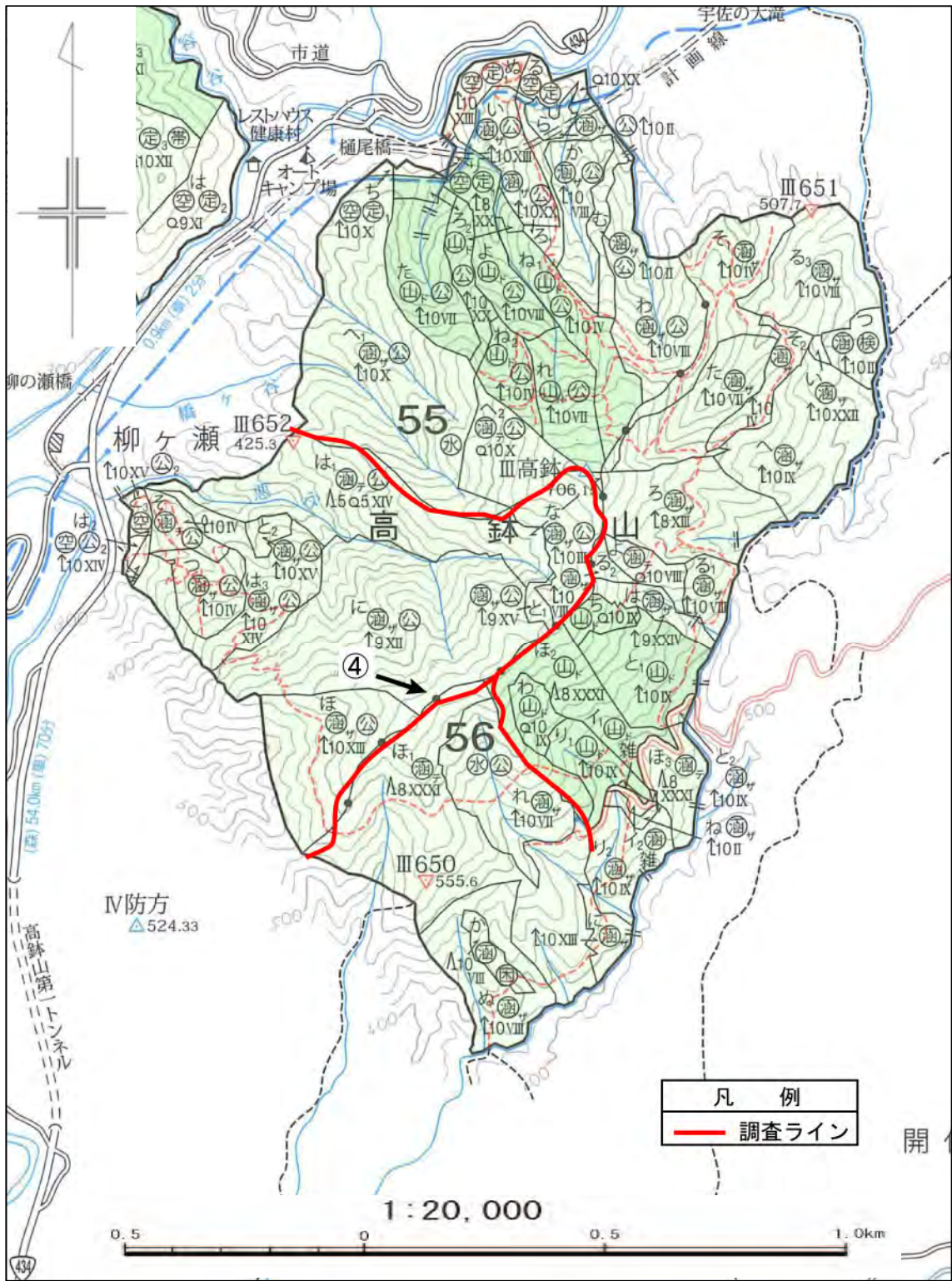


図 7.3.2.1 糞塊密度調査ライン位置図(高鉢山国有林)

7.3.3 森林植生衰退状況調査

森林植生衰退状況調査は1地点で、55-は-1林小班で実施した。図7.3.3.1に調査地点を示す。

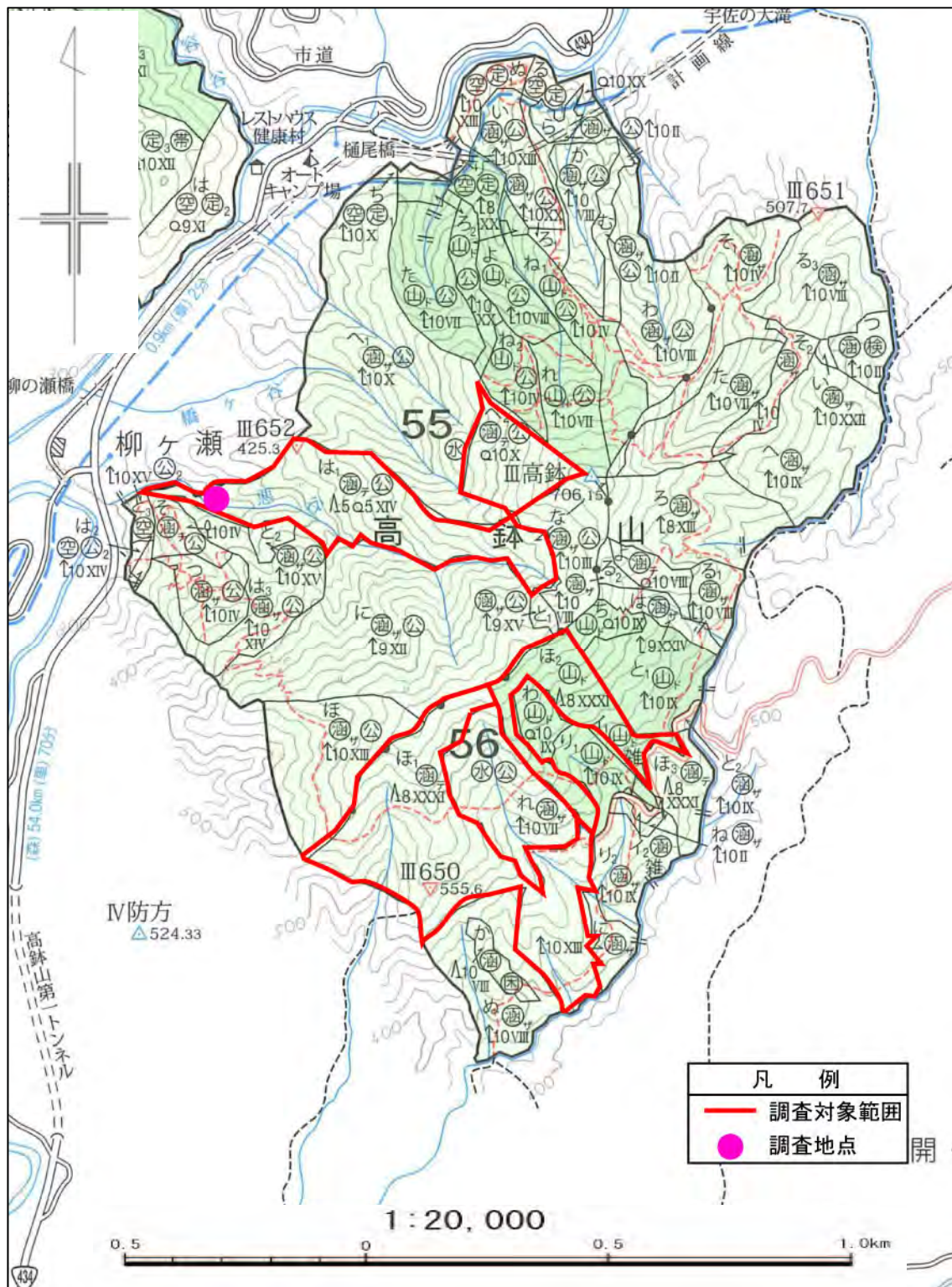


図 7.3.3.1 森林植生衰退状況調査位置図(高鉢山国有林)

立地は高鉢山から西に延びる稜線上である。林分は高さ12m程度のコナラを主構成種とする落葉広葉樹林であるが、調査枠下部付近ではヒノキが混生していた。高木層はコナラ、ヒノキなどが生育し植被率は95%で比較的密な林分であった。林内はヒサカキ、アセビなど常緑の小低木が50%の植

被率で低木層を形成していた。林床部はヒサカキ、ウラジログシなどの稚樹がごく疎らに生育している程度で、ササ類の生育は見られなかった。調査枠内ではシカの採食植物としてリョウブ、イヌツゲ、コナラ、ヒノキの生育が確認された。

調査の結果、この地点では樹皮剥ぎ、枝葉の食痕、ササ類の被食などのシカによる植生への影響は見られなかった。さらに、シカ糞、けもの道などの生息の痕跡も見られなかった。(表 7.3.3.1)

表 7.3.3.1 シカによる植生への影響

階 層	植被率 (%)	シカによる影響				
		被害個体の割合 (%)	樹皮剥ぎ	樹勢の低下	枝葉の摂食	ディアラインの形成
高木層	95	0	0	影響なし		
亜高木層	30	0	0	影響なし		
低木層	50	0	0	影響なし	なし	なし
草本層	5					
ササ層	0	0			なし	

7.3.4 自動撮影カメラの設置

高鉢山国有林では、55-な林小班の1箇所に自動撮影カメラを設置した。

図7.2.4.2に設置地点を示す。

高鉢山国有林で自動撮影カメラにて撮影された個体には、鳥類はヤマドリ、シロハラなど4種、哺乳類はツキノワグマ、ホンドタヌキなど4種で、シカは確認されなかった。

また、撮影回数の約半数はツキノワグマであった。(表7.3.4.1、図7.3.4.1)

尚、寂地国有林、右谷国有林、高鉢山国有林はツキノワグマの分布範囲に含まれている。

(第3期 第一種特定鳥獣(ツキノワグマ)保護計画 平成27年3月 山口県)

No.	綱名	目名	科名	種名	撮影回数
1	鳥 綱	キジ目	キジ科	ヤマドリ	4
2		スズメ目	ツグミ科	シロハラ	1
3			ツグミ科	マミチャジナイ	1
4			カラス科	カケス	1
5	哺乳綱	ネズミ目(齧歯目)	ネズミ科	アカネズミ属	1
6		ネコ目(食肉目)	クマ科	ツキノワグマ	8
7			イヌ科	ホンドタヌキ	1
8			イタチ科	イタチ属	1
計	2綱	4目	8科	8種	18

表 7.3.4.1 自動撮影カメラの結果(高鉢山国有林)

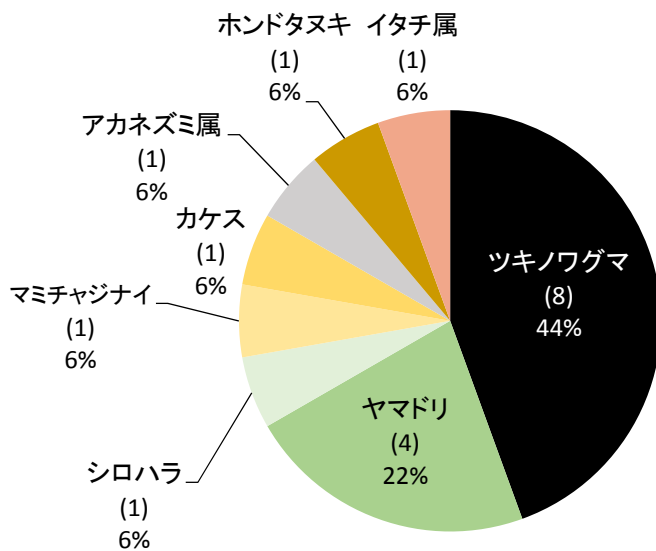


図 7.3.4.1 種別撮影回数の割合

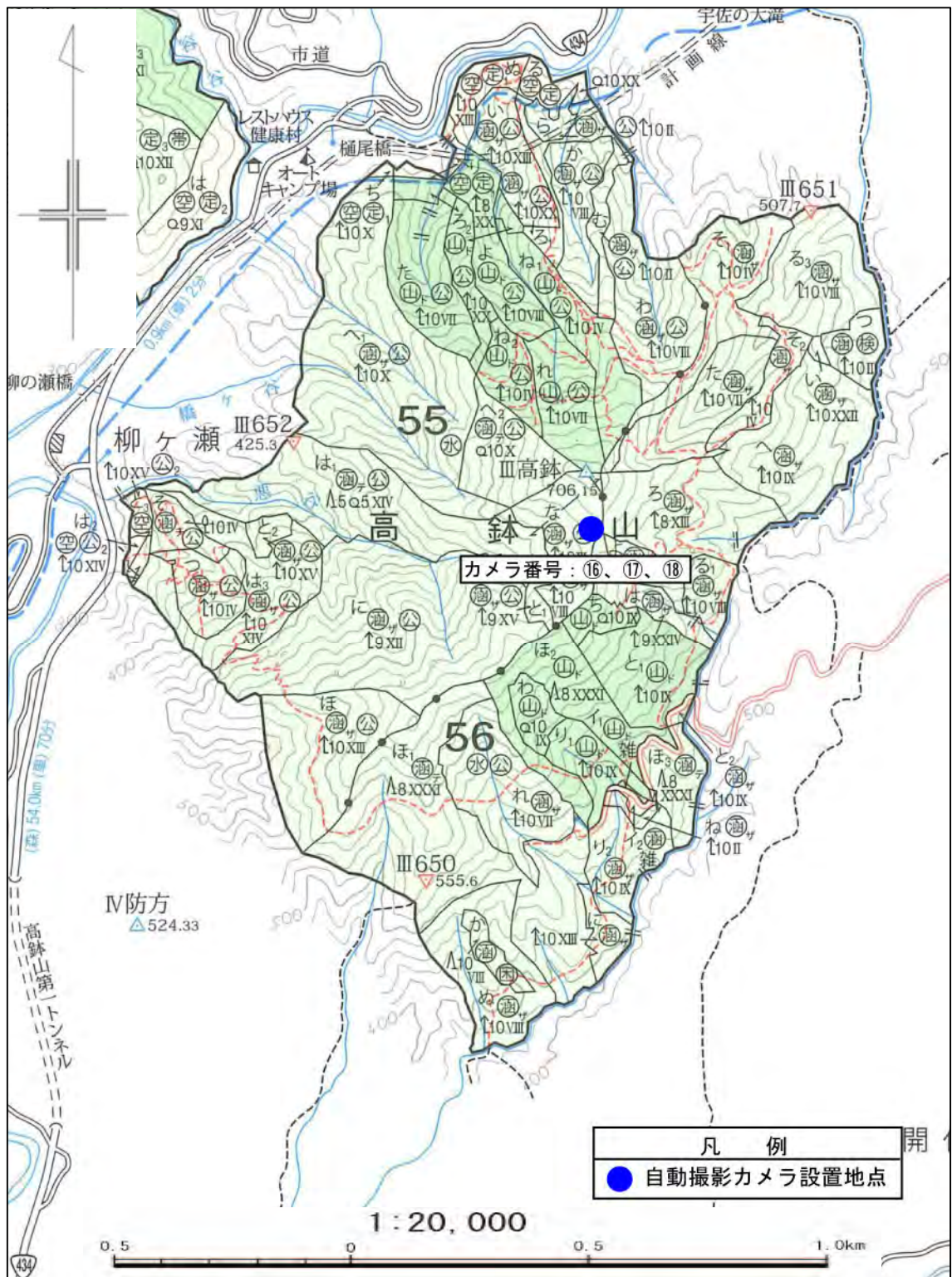


図 7.3.4.2 自動撮影カメラ設置地点(高鉢山国有林)

7.3.5 希少植物の確認状況

調査範囲では糞塊密度調査のルート周辺、森林植生衰退状況調査および自動撮影カメラ設置地点への移動中に、コウヤマキ、エビネ属の一種、ヒトツボクロの3種の希少植物(山口県レッドリスト2018)の生育が確認された。図7.3.5.1に希少植物の確認地点を示し、表7.3.5.1に確認状況を示した。

表 7.3.5.1 希少植物の確認状況

1. 種名	コウヤマキ	
2. ランク	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	
3. 生態	コウヤマキ科の常緑高木 1科1属1種で日本特産種 樹高30m、胸高直径は1mほどの大木になる。長枝の先に短枝が輪生しその先端に葉が着生する独特の形状を示す。 福島県以南の本州・四国・九州に分布。 良質な材で、湿気に強く船材、桶などに利用される。樹形が良く庭木として珍重される	
4. 確認状況	確認箇所は1地点で1個体が確認された。樹高1.5m程度の稚樹で、立地は稜線のアカマツ-コナラ混交林の林床。	
1. 種名	エビネ属の一種	
2. ランク	サルメンエビネ・ナツエビネはCR、エビネはVU、キエビネはNT	
3. 生態	ラン科の多年草。 葉は根生し長さは2~5cmの葉が集まって互生する。花茎は高さ10~12cm。花期は4~5月で草丈は30~50cmになる。 丘陵から山地にかけての落葉広葉樹林の林床に生育。 本州・四国・九州に分布。 園芸目的の採取により大幅に減少している。	
4. 確認状況	確認箇所は1地点で1個体が確認された。立地は稜線のアカマツ-コナラ混交林の林床。根生葉のみでサイズは15~25cm程度。	
1. 種名	ヒトツボクロ	
2. ランク	絶滅危惧ⅠA類 (CR)	
3. 生態	ラン科の多年草。 アカマツ林のような明るい林床に生える。 葉は一枚だけつく。花茎は高さ20~30cmで5~6月に5~10個の花をつける。 本州・四国・九州に分布。 県内では徳地町、徳山市、鹿野町、玖珂町、錦町から記録されているが、県内でも生育地がきわめて限定されており、個体数も少ないので消滅の恐れがある。	
4. 確認状況	確認箇所は1地点で1個体が確認された。立地は稜線のアカマツ-コナラ混交林の林床。葉のみで長さは5cmであった。	

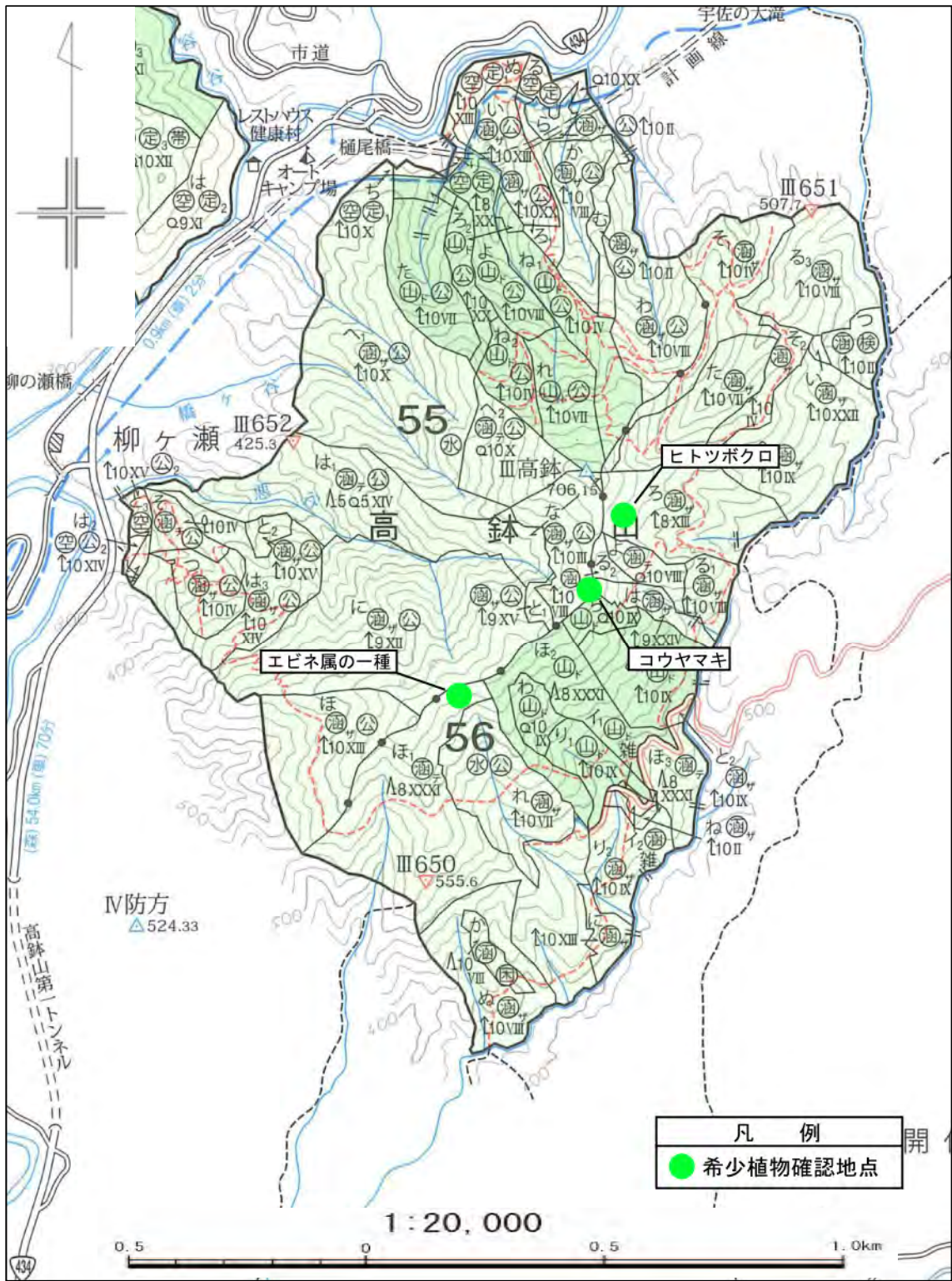


図 7.3.5.1 希少植物確認地点(高鉢山国有林)

7.3.6 移動中のシカ被害の痕跡

糞塊密度調査、森林植生衰退状況調査および自動撮影カメラ設置等の移動中に、シカ個体の目撃、樹皮剥ぎ、枝葉の食痕等のシカの生息の痕跡が確認された場合は記録した。稜線に至る登山道の周辺や稜線上に設定した糞塊密度調査ルート付近ではシカの採食植物であるコナラ、リョウブ、ヒノキ、タラノキ、アオダモ、ガマズミ、ヒサカキ、タンナサワフタギ、スギ、ヒノキの生育が確認されたが、植生への被害は見られなかった。採食植物の判定については、「日本におけるニホンジカの採食植物・不嗜好性植物リスト」（橋本・藤木 2014）に準拠した。

調査の結果、調査ルートでは、樹皮剥ぎ、枝葉の食痕、ササ類の被食などのシカによる植生への影響は見られなかった。さらに、シカ糞、けもの道などの生息の痕跡も確認されなかった。

7.3.7 高鉢山国有林におけるニホンジカの生息状況と森林被害の現況

高鉢山国有林においては、今回実施した糞塊密度調査および自動撮影カメラの設置による調査ではシカの生息は確認されなかった。また、森林植生衰退状況調査でもシカの植生への影響は確認されなかった。これらのことから判断して、現況では高鉢山国有林ではシカの侵入および定着はしていないと推察される。

8 調査結果のまとめと考察

本調査では、寂地国有林、右谷国有林、高鉢山国有林において、シカによる森林被害のモニタリング調査(糞塊密度調査及び森林植生衰退状況調査)を実施し、シカが生息する可能性が高いと想定される箇所に自動撮影カメラを設置して、各国有林のシカの生息状況及び森林被害について検証した。

8.1 調査対象国有林におけるシカの生息状況

図 8.1.1～8.1.3 に各国有林の調査結果の総括を示す。今回の調査ではすべての国有林で、糞塊密度調査において糞塊は確認されなかった。森林植生衰退状況調査ではシカの植生への影響は全く確認されなかった。さらに各調査地点への移動経路でも、樹皮剥ぎや枝葉の採食痕や足跡などの生息の痕跡も確認されなかった。これらのことから判断して、現況ではいずれの国有林でもシカの侵入および定着はしていないと推察される。

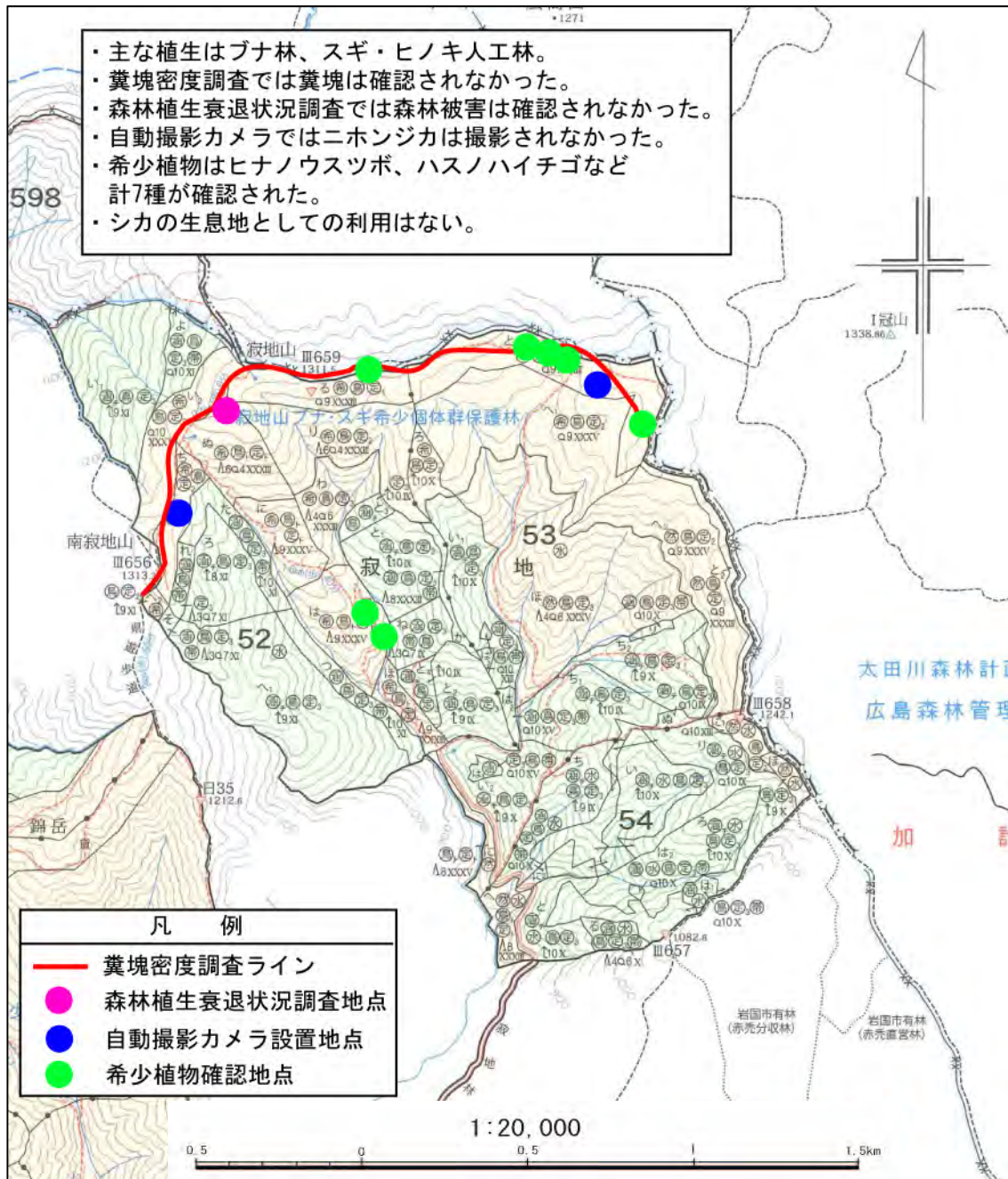


図 8.1.1 寂地国有林の総括

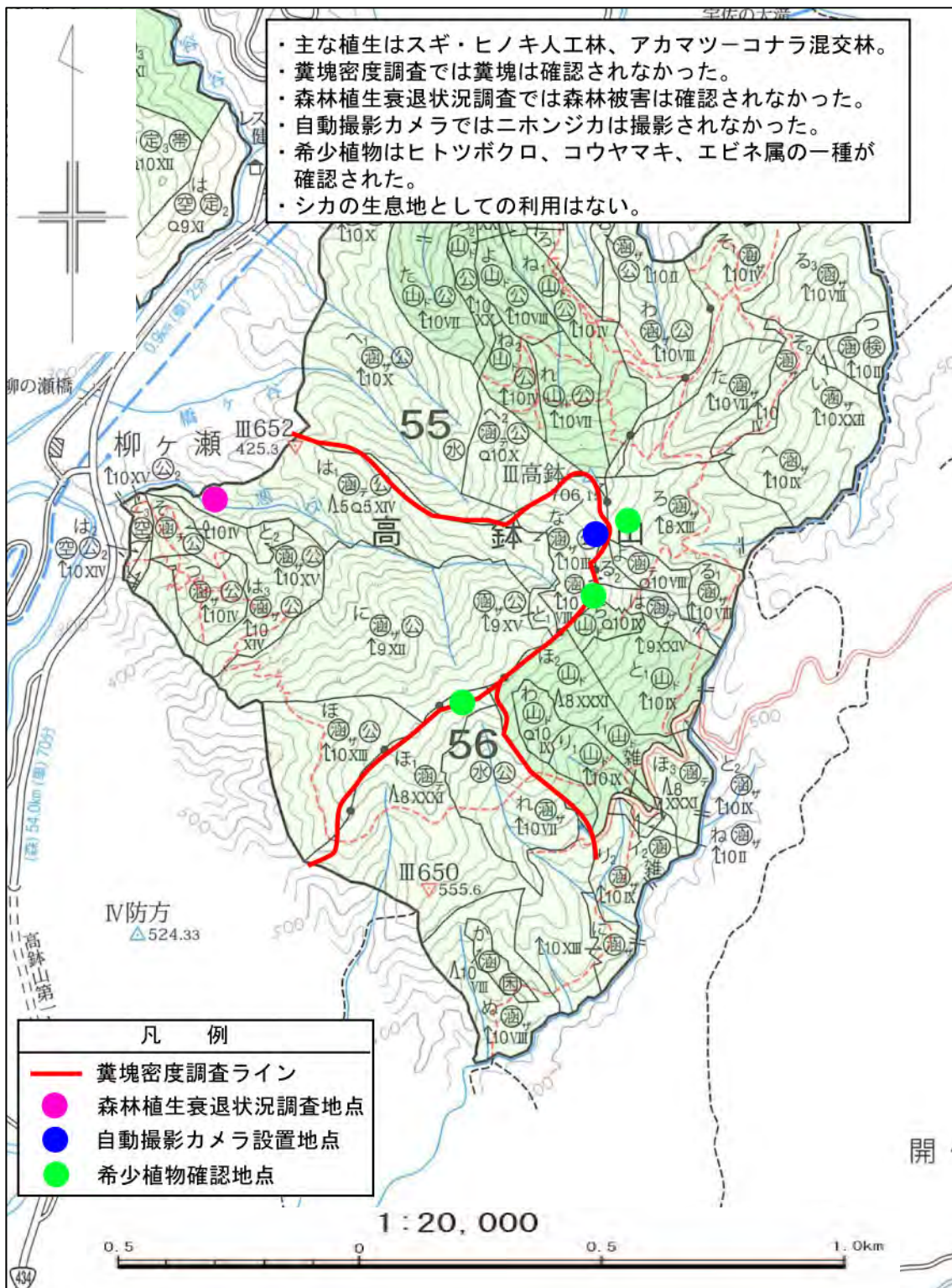


図 8.1.3 高鉢山国有林の総括

8.2 今後のシカ被害対策

表 8.2.1 に今回調査した各国有林の森林調査の結果を示す。

表 8.2.1 調査結果の一覧

国有林名	主要な植生	糞塊密度調査	森林植生衰退調査	自動撮影カメラ	重要な自然環境	希少植物	評価
寂地国有林	ブナ林 スギ・ヒノキ人工林	糞塊は確認されなかった。	植生への影響は見られなかった。	シカは撮影されなかった。	・寂地山ブナ・スギ希个体群保護林 ・カタクリ群生地 ・西中国山地国定公園	カラクサシダ ヤシャビシヤク ハスノハイチゴ ヒナノウスツボ ウスゲタマブキ エビネ属の一種 ミヤマウズラ	シカの生息は確認されず、シカによる影響は見られなかった。
右谷国有林	ブナ林 ケヤキウラジロガシ混交林 スギ・ヒノキ人工林	糞塊は確認されなかった。	植生への影響は見られなかった。	シカは撮影されなかった。	・右谷山ブナ希少个体保護林 ・西中国山地国定公園	ハスノハイチゴ ウスゲタマブキ	シカの生息は確認されず、シカによる影響は見られなかった。
高鉢山国有林	アカマツコナラ混交林 スギ・ヒノキ人工林	糞塊は確認されなかった。	植生への影響は見られなかった。	シカは撮影されなかった。	・羅漢山県立自然公園	コウヤマキ エビネ属の一種 ヒトツボクロ	シカの生息は確認されず、シカによる影響は見られなかった。

今回の調査では、すべての国有林においてシカの生息は確認されなかった。この結果として森林被害が見られない現況では保全対策は当面の間必要ないことと考えられる。表 8.2.2 に今回調査した各国有林の森林の現況、シカによる影響および今後の対策案を示した。

前出の「6. 山口県におけるニホンジカの分布状況」の節でも述べたように、隣接する広島県、島根県のシカの分布情報から、今回の調査対象である寂地国有林、右谷国有林、高鉢山国有林の周辺地域では、これまでシカの生息は確認されていない。ただし、山口県下では今回調査となった国有林が位置する旧錦町と隣接する旧美川町(いずれも現岩国市)では比較的多数の目撃情報が得られている地域があり、将来的には国有林内へのシカの侵入の可能性があると考えられることから、今後の分布域拡大の動向を注視しなければならない。

表 8.2.2 各国有林の森林の現況と今後の対策

国有林名	森林の状況	シカによる影響	今後の森林施業に対する提案
寂地国有林	天然林と人工林の比率が41%と59%。 天然林の主体はブナ林で、寂地山ブナ・スギ希少個体群保護林に指定されている。	シカの生息は確認されず、シカによる影響は見られなかった。 <u>近接地域では目撃情報があり、将来的にはシカが侵入し森林被害の起こる可能性がある。</u>	周辺地域のシカの動向に注視し、現存する森林植生の保全を図る。
右谷国有林	天然林と人工林の比率が49%と51%。 天然林のうち、稜線部はブナ林、溪谷部はケヤキーウラジロガシ混交林が主体となっている。 ブナ林は右谷山ブナ希少個体群保護林に指定されている。	シカの生息は確認されず、シカによる影響は見られなかった。 <u>近接地域では目撃情報があり、将来的にはシカが侵入し森林被害の起こる可能性がある。</u>	周辺地域のシカの動向に注視し、現存する森林植生の保全を図る。
高鉢山国有林	天然林と人工林の比率が22%と78%。 天然林の主体はアカマツ林で、コナラとの混交林分が主体となっている。	シカの生息は確認されず、シカによる影響は見られなかった。 <u>近接地域では目撃情報があり、将来的にはシカが侵入し森林被害の起こる可能性がある。</u>	周辺地域のシカの動向に注視し、現存する森林植生の保全を図る。